Dead of the world

Dr.スポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄｅａｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】

Ｎ０２６３Ｘ

【作者名】

Ｄｒ．スポ

【あらすじ】

ただただ終わった世界の物語。

帰らぬ日常を幻視する。

Dead of one「終わり」（前書き）

そうして終わる。
何もかも終わる。
終わって終わる。
その先も終わりで満ちている。

Dead of one「終わり」

この終末の集いの場所に
我ら交わす言葉もなく潮満ちる渚に集う
かくて世の終わり来たりぬ　―　銃声ではなくすすり泣きのうちに

かくて世の終わり来たりぬ
かくて世の終わり来たりぬ
かくて世の終わり来たりぬ
―　銃声ではなくすすり泣きのうちに
エリオットの詩篇「ホローマン（空ろな男）」より

きっと、その通りだと思う。
つまるところ、この時にはもう世界は終わってしまったのだろうと。
心の底からそう思った。

‡

なにも変わらない日々。
鬱々とした時間が、暇な時間が。空を対流する雲と同じスピードを維持し、ゆっくりゆっくりと流れている。
青い空だ。まばらに存在する千切れ雲が、白い染みのように見えてくる。

「授業はどうした？」
「おやおや。これは学校中の憧れ、毒島冴子（ぶすじま さえこ）先輩。こんな不良に何か御用で？」

「私は、同学年から『先輩』などと呼ばれるほど偉くはないよ」

屋上。

授業をサボる生徒が、時たまたむろしている場所。しかし、その騒がしさを差し引いても心地いい空間だろう。

特に天文ドームの屋根で昼寝をするのが好きだが、如何せん見つかったときが恐いのでいつもはやっていない。いつもは、わざわざ用意したお昼寝セット（枕、レジャーシート）をアスファルトにセッティングして我慢している。

一年の頃から天文ドームの物置に隠してあるお昼寝セットだが、その存在を知っている者は殆どいない。当初はピッキングという強引な手で隠し、今では（無断で作った）合い鍵を駆使しているのだ。

この悪行を止めるには、そもそも鍵の種類を返るところから始めなくてはならない。

ああ暇だ、素晴らしい。だが、これで退屈がなければ尚良し。

などと莫迦なことが出来る程度に、世界は無為で無闇な平和で成り立っている。

故に、それが終わった瞬間に世界は死んだのだ。

「おいおい、サボリか剣道部主将様。教師連中が嘆くぞ？」

「君は人のことを言えないだろう？　先生方が嘆いていたよ」

ふふっと柔らかく笑んだ冴子を無視して、俺は目を閉じた。

どうでもいい。教師の評価になど興味はない。どの道『家督』を継ぐのだから、ここでの評価など殆ど意味をなさなくなる。

それを考えると、自然にやる気は削げ落ち現在へと至ってしまったわけだ。

「お前、ホントに何しに来たんだ？　俺の安眠を妨害するためじゃないだろうな」

「いやいや。今度、我が部で合宿がある。その場所を貸してくれる、そう言っていただろう？　その確認だよ」
「その約束したの、親父殿だろ？　そっちで勝手に話してくれ、俺は今、暇を消費するので忙しいから」

なるほど。と呟いた冴子は、そのまますたすたと歩み寄ってくる。歩み寄り、真横に腰を下ろすと俺の真似をしてアスファルトへ寝転がった。
制服が汚れるのも無視。授業が始まっているのも気に留めず、大きく深呼吸して身体から力を抜く。
おい。という俺の言葉を、不思議そうな瞳で見返してきた。
「何だ、弓塚颯斗（ゆみづかはやと）」
「フルネームで呼ぶなよ莫迦。お前、ホントに何しに来たんだ？」
「君と同じ、暇つぶしかな」

穏やかに微笑み、冴子は瞳を閉じる。じんわりと来る暖かさを全身で味わっているようだ。
こうして彼女に絡まれるのは慣れたもの。
先の『家督』にも関わってくる話だが。この毒島家と弓塚家は『道場』を開いている、という意味で昔から親交があったらしい。
家族ぐるみでそれぞれの道場、あるいは流派について語り合うなどというとんでもないことをする度に、毒島家ご令嬢とは顔を合わせることになったのだ。
あるいは、それが運の尽きだったのかもしれない。
「まったく、面倒くさい世の中――」
不意に俺の言葉を遮って、校内放送スピーカーが音を発した。
がたがたと向こう側で物音がしたかと思ったら、職員室から全校

関係者へ向かって連絡事項が述べられる。今にして思えば、これこそ終末を宣言する言葉だったのかもしれない。

『緊急連絡！　校内で暴力事件発生！！　生徒は教師の指示に従って速やかに――』

連絡事項として意味があったのは、そこまでだった。

それ以下に連なるはずだった言葉はなく、もはや絶叫とも嘆きとも訴えとも聞こえる高音が不快な音律を連ねて放送が途絶。一瞬にして、世界は静寂と化す。

動きはない。おそらく、誰もが状況を理解できなくて硬直している。この僅かばかりな静けさは、思考を純化するための時間であるからすぐにでも引き裂け――た。

「まったく、地鳴りかよ。まだ動くんじゃないぞ主将様」

「ああ、わかっているよ。だが、行動の方針が必要だな。私は教室に木刀を置いてある」

「そうかい。俺は保健室に置かせてもらってるな。だが、弓道場にも用がある」

言葉を交わしながら、二人して屋上の鉄扉へ慎重に近付く。まるでアクション映画のように両脇に張り付き、互いにアイコンタクトで合図を出し合う。

ゆっくりと冴子が扉を開くが、誰も飛び出してくる気配はない。続いて中を覗き込んでも、先ほどの大音響が嘘のように静かなだけだ。

鍛錬の中に聴覚強化がなければ、遠くで響く絶叫を聞き逃していただろう。と思いながら、階段へと進む。

「さて主将様、レディーファーストです」

「騎士はお姫様を守るものだよ」
「残念。表の顔とは言え、うちは弓塚流『弓術』なんでな。後方支援が得意なんだ」
「こちらは手に刀も無いというのに」

無くても強いだろうに。と呟き、懐から小さな刃物を取り出す。
打根（うちね）と呼ばれるそれは、端的に言ってしまうなら投げる矢だ。
弓を必要としない、投擲型（やじり）鏃と言えばわかりやすいだろう。事実、その刃物には尾に風切り羽が付いている。
全部で一四投分。よくわからない場所へ行くには、些か心許ない武装だ。

「途中で分かれるぞ。お前の教室へ寄った後、俺は弓道場へ行くからお前は保健室へ行ってくれ。鞠川先生が無事ならすぐに見つかるはずだが、一番奥のベッドの下にわかりやすいのがあるはずだ。回収頼む」
「わかった。合流場所は？」

ゆっくりと最上階へ降り立ち、両側へ伸びる廊下を見回しながら冴子は言う。彼女の手招きに応え、階下を覗いていた俺は身を翻しながら。

「正面玄関だな。お互い、辿り着いたあとにどうしても移動が必要な場合は目印を残そう」
「了解した」

廊下は無人だ。少なからず、見える範囲に『生きている人間』がいない。床に伏せて動かないのなら何体かいるが、おそらく先ほどのパニックでコケてしまったのだろう。踏まれて圧死、というのが妥当な線だ。

行くぞ。と小さく言って、先に俺が廊下に身を踊らせる。
こんな場所をトロトロ進むのに意味などない。足音は極力殺し、されど全開の速力を持って駆け抜ける。同じように後ろを付いてくる冴子を確認して、まず一つ目――我らがの教室へと転がり込んだ。
言うまでもないが、中は無人。暴れ回ってぐちゃぐちゃになった風景しかない。

「あったぞ」

黒塗りの木刀を掲げる冴子に、頷きだけで応えて廊下を見渡す。
まだ、無人だ。

「すぐ次に行くぞ。」
「ああ」

再度、廊下が無人な事を確認してから教室を飛び出す。
全力疾走の為に一歩目を踏み、続く足の回転を早め。それは思いがけず四歩目で停止した。
それは、不意に現れた。数メートル先の正面。形だけなら、人のようなモノがいる。
だが、二人はそれを生存者と判断しない。脇腹がごっそりと抜け落ち、内蔵を地面に引きずるそれを人などと呼べるわけがないのだ。
唸るような音を喉から発し、焦点の合わない瞳はどこも見ておらず。否、あるいは見えていないのか。

「なんだ、あれは」
「さあな。っと待て主将様。不用意に近付くな、あの感じだと普通に殺しても死なんぞ」

木刀を構えて走り出そうとした冴子を、颯斗が制した。彼の手に

は、鈍く光る刃物がある。
打根だ。
両手に一投分ずつ持ち、下がるように顎で促す。
軽く肩を竦めて応じる冴子を背後に、身体を半身にずらして上段の投擲フォームを取る。
それは野球のピッチャーがボールを投げるのに似たフォームだった。左足を一歩前に踏み出し、腰を捻って威力の底上げを計る。あまりに速く動く手がブレたという事意外でなら、素人にはその差がわからないほど酷似していた。
だが、そのブレこそが大きな意味を持つ。
風を引き裂く音が短く唸り、気付けば刃物が心臓へと吸い込まれている。
深々などというのも生易しい。打根がほぼ全て埋まるほど深く肉を貫き、しかし『それ』は一瞬傾いだだけで止まらなかった。必殺を用いて、されど未だ『存在(い)きて』いる。
くるりと身体を優雅に回す。舞わせた颯斗は、続く動作で左手を裏拳気味に振り抜いた。
また、手がブレる。
次に打根が到達する場所は頭。的の狭いおでこへ正確に刃物が吸い込まれていく。
今度は流石に半分ほどしか刺さらなかったが、それで十分に脳へ達したらしい。気味の悪い動作で身体を小さく震わせ、同時に床へと倒れ込んだ。
もう動かない。

「頭だな」
「ああ、頭だ」

疾走を再会する。
先ほどの階段へ辿り着き、更に階下へ進んで『それ』らが一気に

増えたとき。最早、二人は迷わなかった。何も理解できないが、成すべき事だけはわかっている。
いや、正確には何も理解できていなかったのではない。
ああきっと、この世界はもう駄目だ。少なからず、颯斗はそれを本能的に理解していた。
退屈だが暇な日々が、颯斗には実に眩しい。出来ることなら、あの日々へ帰りたかった。

Dead of two「部長」（前書き）

救いたいのか
救われたいのか
わからぬままに手を伸ばす

Dead of two「部長」

階下へ続く階段までエスコートした後、早々に冴子と別れた颯人は音もなく廊下を走っていく。

彼の家系は、とある技法と弓術を伝承する奇特な家だ。平和主義の日本国内で心を練磨する弓道とは違い、戦場で効率よく人を殺す方法に特化した武術を伝承するなど正気の沙汰ではないだろう。そして、それに付随する様々な殺人の技法を後世に伝えていくのも、また実に莫迦らしい。

無駄に広大な道場に、数名の門下生を抱えて死と隣り合わせの特訓。そんなものは過去の遺産で、現代においては欠片も流行らない。

颯人は心からそう思っていたし、こんな事になってしまった今でも考えは変わっていなかった。

流石に家計を助けるためと、一応の弓道を教えてもいるが。主に明日の飯を食べるための収入源は、もっと黒々とした暗部から捻出されている。

現当主。

後々に自身が受け継ぐ地位でふんぞり返っている人間は、まともな死に方を許されていない。前任の当主は、確か某山中でズタズタに引き裂かれた死体となっていたとか。

当然、死が世間に知らされることはなく、そもそも存在すらしていなかった事にされている。

それがデフォルトな世界。そこに幼少期からどっぷりと浸かっていた颯人は、足音や気配を消すことなど日常的にこなしていた。

ただ殺すだけなら、才能に満ち溢れすぎる少年。現当主を相手取っても、殺と名の付く技法だけは軽く凌駕してみせる異才。

それらを持って生まれてしまった少年は、表情もなく正面に現れた≪死体≫の首を捻じ折った。

視力や触覚は効かず、聴力だけで動く彼らには理解も出来なかっ

ただろう。走る速度を保ったままに飛びつき、全体重を乗せたサブミッションが決められたことなど。
倒れ込んだ自身の身体が立てる音に反応して、何かに噛みつこうと顎を動かし低く唸る。されども、地に伏した≪死体≫の身体はピクリとも動く気配はなかった。
脳だけが弱点と言っても、生体電気を送受信するパイプたる神経を破壊されては動けるはずもない。
無視して進む。向かう先は弓道場だ。
冴子に任せた装備を回収してもらったところで、武器が多い分に問題などないだろう。むしろ、弓というのは矢を消費するのだ。即席で木の枝などから作る技法を知らないわけではないが、手間が省けるのは十分に助かる。
障害にならない≪死体≫たちを無視して、一気に廊下を駆け抜けた。校舎間の渡り廊下から外へ出て、中庭を一直線に横切りながら我が校の弓道場を目指す。
あるいは、同じく武器を求めた生徒がいるかもしれない。少しでも生き残る人間が多いなら、その方がいいに決まっている。
人を殺すための技法で人が救えるなど、皮肉な事この上ないが仕方なかろう。無事な人間を連れて、冴子たちと合流するのが利口だ。

「……」

弓道場の前で停止し、中の様子を探る。
そもそも、弓兵は沢山を横一線に並べて弾幕を張らせるのが正しい戦場での運用だ。個人行動を前提にすると、隠密と言うよりスナイパーの様な行動を要求される。
安全な狙撃ポイントの確保。闇に紛れる技法。迅速なショット&ムーブ。
聴覚の強化もコレに依存する物で、実銃こそ扱ったことはないが行動の基本はだいたい同じだ。

中から微かな物音を聞いて、颯人は打根を取り出し構える。
引き戸を開け、向こう側の壁際を左右から確認すると音もなく中へと滑り込む。
見える範囲に≪死体≫は見あたらない。だが、音は今も確かに聞こえている。
震える様な軋みの音に、生存者の可能性を顧慮しつつ奥へ。拓けた弓道場の的付近に、二つの≪死体≫がうろうろしているのを視界に納めた。
はだけた着物に袴姿。体育か、はたまた大会直前で授業をエスケープしてまで練習していたのだろうか。二人の少女は、肩口をごっそりと失った姿で壁にぶつかり続けている。
足下に落ちていた弓と矢を二本拾う。
型などない。おそらく弓道的には減点対象となる様な姿勢で、しかし恐ろしいほど速く正確な射が二発続く。
風を切る音は一瞬。寸分違わず、鏃のない『安全な矢』が眼球を穿ち脳を抉る。

「的中」

どこか自嘲気味に呟き、動かなくなったのを確認して踵を返した。矢をもう四本拾って打根をしまい、未だ消えない小さな音を辿って歩を進める。
音が聞こえてくるのは、どうやら用具入れの中からのようだった。中に誰か隠れているのか、はたまた何かが捕らえられているのかはわからない。
軽くノックして、五歩下がる。瞬時に矢をつがえ、引き絞って戸に照準を合わせた。
これで相手が≪死体≫なら、今の音に反応して戸に激突するはずだが、いくら待ってもそんな気配はない。だが、かと言って反応があるわけでもなく。僅かに身動ぎする様な音が鳴っただけだ。

中にいるのは、人である可能性が数段に跳ね上がる。

「中にいるヤツ、出てこい。そこにある武器を独占しているつもりだろうが、ここにいると死ぬぞ？」

また、僅かに身動ぎの音が鳴った。更に人である可能性が高まる。

戸に手を掛け、開いて五秒経ってから中を覗き込む。攻撃がなかったと言うことは、錯乱していないか恐怖で身体が動かないからか。どちらにせよ、武器を独占するために立てこもったわけではない事を証明している。

ならばと薄暗い倉庫内に身体を滑り込ませ、一応身を低くして襲撃に備えつつ明かりの電源をオンにした。白熱球が不自然な白で辺りを照らせば、一人の少女が膝を抱えて震えている姿を浮かび上がらせる。

知った顔だ。

既に『弓術』の作法が染み着いた颯人に、部活としての『弓道』は出来ない。癖として確立してきた射型は競技場で放たれる弓道のそれに程遠く、とてもではないが部活動に参加できるような代物ではなかった。

しかし、身近に弓を引ける場所があるのは非常に助かる。今や剣道部で主将をしている冴子の口添えもあり、色々な雑用を手伝う対価として出入りの自由を許してもらっていた。

的を貼ることは出来るし、弓道としての射型を知らないわけでもない。的中のコツなど聞かれて困ったこともあったが、颯人は暗黙の了解で半部員として認められる位置にいる。

たびたび弓道場へ足を運び、今年度でもっとも多く挨拶を交わした人物。この部の部長が、倉庫の隅で小さくなっていた。

「部長？　無事だったんですね」

「……」

答えはない。代わりに、焦点の定まらない瞳が小刻みに行ったり来たりしている。
憔悴しきった様子の顔は真っ白で、血の気が失せた唇が譫言のように何かしら呟いていた。相当ショックなものでも見たのだろう、根本的なところで心が折れかかっているらしい。
言葉を選んで声をかけるべきなのだろうが、残念なことに言ってやれることは見当たらなかった。
大丈夫、すぐ誰かが助けに来てくれる。心配しなくても明日にはすっかり元通りだ。ここにいれば安全だよ。
欺瞞に満ちた言葉をこの場で吐けば、きっと彼女の心は救われる。そして緩みきった心で外に出て、彼女も≪死体≫に仲間入りしてしまえば苦しくはなかろう。
むしろ、この場で痛みを感じる暇もなく永遠の眠りにつかせてやった方が良心的なのかもしれない。そのための技術も心も、颯人は持ち合わせている。
だが、しかしだ。そうなったところで世界に変化はない。相変わらず動く≪死体≫が至る所を闊歩して、やがて世界の前に社会が朽ち果て消えていく。
再び猿が霊長の頂点に立つ事は、もしかするとやってこないかもしれないかもしれない世界が出来上がるわけだ。
回避する方法は難しくもない。
男と女が一人ずつ生きていれば、あとはアダムとイヴよろしく増えていくだろう。生き残りが多くなれば、その分だけ加速度的に。
少しでも沢山生き残る必要がある。あくまで≪死体≫どもを全て排除出来ればという前提はあるが、種を残す手段として有効な答えを脳内に描いて動く。そうするためにはどうすればいいか、そうなるにはどう動けばいいのか。相手の意志はおろか、自分の心すら考慮に入れないで判断する。
俯く顔を無理やり持ち上げ、状況判断が追いついていないのも構

わず唇を重ねた。
驚きで、彼女の瞳が色を取り戻す。が、まだ脳は正常に動いていないらしい。更に舌を侵入させ、前歯をなぞるように嘗めとったところで反応がくる。
突き飛ばされて二歩ほど後退した視界の中に、酸素を求めて口を何度もパクパクさせる少女がいた。信じられないと、さっきまでとは違う意味で状況についていけないと訴える視線を無視して手を出す。

「いくぞ。さっさと来い」

理解力が追いつくよりも速く、颯人は強引に手を取って少女を立ち上がらせた。
手近にあった適当な鞄から中身を抜き、風切り羽が外へ突き出す形で運べる上限いっぱいまで矢を収納する。それを二セット作り、一つを少女に持たせると早々に弓道場を後にした。

「いいか？　あの≪死体≫どもは音に反応する。ここから安全だと思う場所まで移動するが、極力喋るな。足跡も出来るだけ消せ。音が出そうな装飾品も、ここに置いていけ」

彼女とは普段から顔を付き合わせているが、こんな口調で喋ったことなど当然ない。相手は同級生でありながらも、場借りしている部の部長だ。喜作ではあるが、丁寧な敬語で言葉を交わすのが常である。
だからだろう。普段と全く違う雰囲気で喋る男へ、素直に頷いて彼女は答えた。
音が鳴りそうな携帯の電源を切り、ストラップを取り外して地面に置く。鍵に付いた小さな鈴も同じく取り払って、音が鳴らないように気を付けながら地面に置いた。

鈴が地面に接触した瞬間。異様に響く高音が鳴ったのは、完璧に予想外の出来事だった。
慌てて振り向き、自分じゃないと主張しようとした声を物理的に押さえ込む。
音源は一〇〇メートルほど離れている。颯人の聴力を駆使すれば、その程度のことを知るのは難しくもない。
問題は、この音でどれぐらいの≪死体≫どもが反応したかということだ。

「いいか。離れるなよ？」

弓に矢をつがえ、慎重に歩いて進む。荷物の立てる小さな音にすら気を使い、音の響いた場所へ向けて迅速に進んで行く。
音の方向と距離から逆算すれば、正面玄関の付近であることがわかる。そこは冴子と合流する予定の場所なのだから、今の音は彼女の立てた物なのだろうか。
いや、あの武士まがいはそんなへまをしないだろう。と言うことは、こちらと同じく誰かを助けたのかもしれない。同行者がドジを踏んだと言うのなら納得がいく。
どちらにせよ、音源には生存者がいる確率も高い。

「……おっと、こいつはマズい」

視界が開けた。
眼下に広がる一段下の広場を、複数の人が走っている。音に引き付けられた≪死体≫どもを大量に引き連れて。
進行方向の先にはマイクロバス、おそらく脱出の手段にするつもりなのだろう。だが、このままでは後続が間に合いそうもない。

「まったく、仕方ないな。部長、荷物を置いて後ろを見張っててく

れ。≪死体≫が来たら喋ってもいいぞ」

自分の荷物も足下に置いて、颯人は神経を尖らせる。

距離は目測で九〇メートルほど。遠的の最大距離と同じほども離れているが、高低差の事も考慮するなら単純に弓道のそれとは難易度が違いすぎた。

実際、この環境で部長が射ても的に中(あ)てる事は出来ないだろう。全面を保護された弓道場と違い横風のこともある。的に中(あ)てるどころか、下手をすれば途中で失速して落ちてしまうかもしれない。

しかし、口の端を釣り上げる男からしてみれば大した距離ではなかった。

くるりと大弓を回すように構えた颯人は、無造作に四本の矢を引き抜いて同数の連射を行う。

あまりにも自然な、呼吸でもするような感覚の射撃が続く。

弓構えもなければ残身もない。それどころか、弓道をやっている者からすればどうして矢が飛んでいるのかも理解できない様な射型だった。

おおよそ弓道ですする前動作や後動作――射法八節――を全て省略し、且つ余韻で震える弦を無理やり掴んで制止させての次射。矢を取っては敢行される無茶苦茶な射撃は、しかしフォームの汚さに反して一発も外れない。

後尾付近を走っていた少年の、首から掛けたタオルを掴む≪死体≫がいれば噛みつく前に射殺し。同時に残りの三連射で周りを掃除する。

道行く先に≪死体≫が群がり、マイクロバスへの道を塞ぐなら『四連射の連射』でもって道を拓く。

バスに取り付かせず、足を挫いた教師を赦さず、奮闘する剣士を襲うこともさせず。鬼気迫る威力の矢が、たった一人で六人分は放たれている。

「き、きた……」

掠れるような声が、颯人の背後で呟いた。

一瞥する程度に振り返れば、鈍い足取りの≪死体≫が四つ。弓が震える音を頼りに、こちらへ向かってきているらしい。

眼下。眼鏡の教師が忌々しげな表情をしながら、足を挫いた生徒を背負ってバスへ合流する。殿に残っていた剣士が木刀を振り上げ、こちらに合図する姿へ射撃で答えてから身体を回す。

四連射。

それだけで、脅威は瞬間的に拭われた。

「こっちも移動しようか、部長。出来れば、あのバスに追いつきたい」

持ってきた矢は四分の一を消費している。痛ましそうな部長の視線を辿れば、ゆがけも無しに弦を引いた代償なのか親指が薄く切れていた。

見た目以上に出血している指を舐めながら、バスの行方を確認するべく振り返る。向かっている方角は市内地だろうか、家族の安否を確認するつもりなのかもしれない。

それならば市内と市外を分断する川を渡るため、どこかの橋を通過するはずだ。運が良ければ、その辺りで合流できるだろう。

移動ルートを探って視線を動かし、そこで不意に取り残された荷物を発見した。先ほどまでバスが止まっていた位置であることを考えるなら、何かしらの贈り物だろうか。

目を細めて視野の倍率を上げれば、やけに見覚えのある大きな鞄が鎮座している。

「おお、主将殿はわかってるじゃないか。荷物を彼女に任せて正解だった」

喉を鳴らすように笑い、喜々として準備を始める颯人に部長は戸惑う。一〇〇メートル近く離れている米粒ほどの物体を、正確で子細に見ることが出来る視力が驚異的なのではない。自分が何をしていいのかわからないのである。

「あ、あのね！！　私、桧山（ひやま）。桧山妙子（一たえこ）って言うの！！」

「ん、あ？　いや、知ってるが」

「あのね、だからね。その、部長とかじゃなくて名前で呼んで欲しいなあ、なんて……その、初めての人だし」

ぽっと頬を赤らめ、手で軽く唇に触れる様は可愛らしいの一言につきる。

桧山妙子の外見が人並み以上に、いやむしろ極上と言っても過言ではないほどの美少女なのだから当然か。

腰の辺りまで伸びた艶やかな黒髪と、ずっと緊張下にあったせいかやけに潤む黒い瞳。ぱっちりとした目には二重が刻まれ、更に長い睫毛が彩りを加えている。

何かにつけて鋭い印象が先行しがちなどこぞの主将とは正反対。大和撫子を思わせる優しさと奥ゆかしさを秘めた、母性の塊のような雰囲気を身に纏っていた。

不意に射撃。

見開かれた目の真横を矢が通過し、背後で何かの倒れる音が響く。

「では桧山さん、さっさと行こうか。ここで≪死体≫どもの餌に成る前に」

にやりと笑う姿は、普段なら彼女に見せることもない物だ。だが、今の世界に前までと変わらない物などない。

故に笑う。不適に不敵な笑みで、妙子の中に芽吹くはずだった恐怖心と世界観を喰い尽くす。
常識も良識も麻痺しかかった少女に、弓塚颯人は手を差し伸べる。まるで救世主の様に見える悪魔の手を、彼女は躊躇いなく握り返した。
どの道、ここで置いて行かれれば待つのは死である。

「さて、じゃあ正面を突っ切っていこう。あそこの置き土産も回収したい。なあに、音さえ立てなければ目の前を通っても反応しないさ」

顔を強ばらせながら何とか頷く妙子に、颯人は思わず失笑する。
先ほどまで真っ青になるくらい怯えていたのだ。壮絶な力を見せつけられ、僅かに沸き出した希望では払拭できない物があるのだろう。
仕方ないと呟きながら矢を三連射して、反対側の校舎の窓を射抜く。ガラス片が飛沫を上げる響きは、大音量となって周囲の≪死体≫どもをかき集めた。
効果のほどは上々。置き土産までの道のりから、相当数の障害物が取り除かれただろう。

「さて、じゃあ今度こそ行こうか。これ以上は、流石に減らしようもないしな」

軽くなった方の荷物を持たせ、矢を弓につがえたまま石造りの階段を降りる。減ってはいるものの、ゼロではない≪死体≫の数が嫌なプレッシャーを感じさせていた。
一定以上の距離が保てるルートを慎重に選び出し、広い中庭を蛇行するように歩く。ただ学校の敷地から出るだけならばもっと簡単なのだろうが、如何せん中間地点として荷物を回収したい。

欲の出し過ぎ、と言ってしまえばそこまでだが。むしろ、今後のことを考えると弓道部の大弓は邪魔にしかならないだろう。
使いにくい他人の武具より、運用性に富んだ自前の武器の方が心強い。
直線距離の倍以上を歩き、何とか荷物を回収する。中身が音を立てないよう、慎重に持ち上げて背に担いだ。
軽く頷き、再び妙子を伴って歩き出す。
今度は敷地外へ出るだけで、先ほどの半分もかからない。殆ど直線で進む颯人に、背後では少女がハラハラしていた。

「さて、俺たちも足が欲しいな。歩きではマイクロバスに追い付けそうもない」
「そ、そうね。でも、そんな都合よく乗り物なんて」

普通のボリュームで喋る声に、辺りを警戒する小さな声が答える。
付近に≪死体≫がいないことを理解していても、どこからともなく恐怖が沸いてくるのだ。それが声に反映されていても、なんら不思議なことはない。
むしろ平時通りに反応が出来る男が、これまでどんな環境で育ってきたのか疑問である。
おもむろに、先ほど回収した荷物を開いた颯人はそれらを身につけていく。二本の大振りなナイフを脇の下へベルトで固定し、折り畳まれていた矢籠（しこ）――矢を収納するもの――を展開して腰へ斜めに装備する。大きな瓢箪（ひょうたん）を逆さにした様なデザインの収納器へ、羽根が出るように矢を納めた上で蓋をした。
三つ折りにたたまれた和弓とアーチェリーの中間の様な弓を、矢籠の上側へ設置してほぼ完成である。最後に取り出したゆがけ――弓を射る為の手袋――は親指、人差し指、中指だけを鹿革で覆う物で、異様なことに西洋鎧の様な節のある鉄で甲側が手首まで全面的に保護されていた。

一歩間違えば、鉄籠手にも見えそうな代物を右手だけに装着する。

「さて。じゃあ、ちょっくらそこにある車でも拝借しよう。気の利く剣道部主将様が、荷物の中に素敵な物を入れておいてくれたらしい」

小さな金属音と一緒に、颯人が右手を差し出す。手のひらに乗っているのは、よくある乗用車のキーだ。

どの車のキーなのかなど聞かない。付いているストラップから、誰が所有していた車なのかなどすぐにわかる。学校の敷地へ引き返すまでもなく、軽クーペタイプのダイハツ・コペンが駐車場の入り口近くに止めてあった。

鞠川養護教諭の車。丸くて小さなフレームが可愛くて仕方ない、と何度も機械音痴な彼女は言っていた。事ある毎に、ミッション車としての整備を任されていた日常が懐かしい。

「行こう。和弓は置いていくが、持っていたいか？」

妙子が首を振るのを見て、颯人は頷きを答えにする。

そもそも、コペンの車内に和弓のような大きな物を入れる余裕などあるはずもなく。また彼女の『弓道』に≪死体≫たちを殺せる能力はない。

持っている方が精神的余裕はできるかもしれないが、生き残る確率を上げるためには持って行かないのが最善だろう。

コペンの周囲には、幸運にも殆ど　≪死体≫が見あたらない。五メートルほど離れて、まばらに六体が歩いているだけだ。

待つように手で指示を出してから颯人は音もなくコペンに近づく。細心の注意を払って鍵を捻り、慎重にドアを開ける。

エンジンを掛けるのは最後だ。手招きして妙子を呼び寄せ、さっさと荷物を後部座席へ放り込む。

助手席へ妙子を座らせ、ドアを閉めるのと同時にイグニッションキーを捻った。どの道、車のドアはある程度の速度がなければ半ドア扱いになってしまう。音が出るのは避けようもない。
それなら、音が出る行程を同時に済ませてしまおうという配慮である。

「すごく今更だけど、運転できるの？」

フロントガラスの向こう。音に反応した≪死体≫が二つほど、のそりのそりと歩いてくる。
いや、正面だけではなかった。三六〇度、全方位より学校中の≪死体≫が歩を進めてくる。
だが、そんなことを颯人は気にしない。
後ろ腰に付けた弓装備が邪魔にならない所まで座席を下げ、悠長にバックミラーの調節をしている。
終わったかもしれない、と思ってしまっても仕方ないだろう。暗い未来がやってくる前に、せめて未練の一つでも晴らそうと腰を浮かせた妙子は――しかし、一瞬にして座席へと押し戻された。
え？　と間抜けな声が出ると同時に、ボンネットに何かがぶつかり錐揉みする様が視界を埋める。

「運転は出来る。が、免許を持っていない。これは警察に見つかると捕まるなあ」

ニヤリと笑う男の手が、滑らかにギアをサードへ叩き上げた。クラッチ空けるのとアクセルを踏み締めるのは同時。
一瞬の加速感と連動して、更なる≪死体≫が一つ弾け飛ぶ。

「ナイスショット！　鞠川教諭には申し訳ないが、適当なところで乗り捨る程度の扱いにさせてもらおう」

タイヤのゴムが、アスファルトを鋭く削る。
何度も響く甲高い音に身体を揺すられ、コペンは外観に似合わない手荒な運転で道を進む。
終わってしまった世界の、秩序も法も消え失せた世界を。ひたすら走る。

Dead of three「当主」（前書き）

心はある
しかし、機械である事を求められた
では、何になればいいのだろうか

Dead of three「当主」

バスの後を追うようにコペンを走らせ、ときどき現れる≪死体≫をはね飛ばしながら進む。途中、作動したエアバックで面白おかしい事態にも見舞われたが。ナイフで切り取られたそれは、今や後部座席で沈黙していた。

「交通事故の怖さを、心から理解したわ」

「まあ、エアバックに押しつぶされて呼吸困難になることは稀ですけど」

何か言った？　と妙子が視線を向けてくるので、颯斗は窓を開けて空気の入れ換えを始める。

ガソリンの節約を考えるなら停車中はエンジンを止めるべきだし、もちろん空調なんて使わない方がいい。

ところが夏場の車内は地獄だ。今の時期が夏真っ盛りでないのは、不幸中の幸いだったと言えるだろう。

何より、車が停車していることに問題があった。走ってさえいれば、目的地に近づくし風も入ってくる。快適かつ順調な進行には欠かせない要素だ。

だが、現実は停車中である。

目の前。御別橋へと続くはずの道には、大小さまざまな車両が列を作っていた。蛇行している道の向こうまでは見渡せないが、橋の入り口まで続いているのだと仮定するなら相当な距離である。

ぴくりとも動かないのは、果たして車両が殺到しているせいなのか。あるいは、もっと別の理由があるのかもしれない。

時刻は昼を少し過ぎた辺り。昼食よりも騒動の方が早かったため、小腹が減り始める時間帯だ。

が、そんなことよりも更にまずい問題が迫りつつある。
夜。闇に包まれる時間帯は、視界というより精神的な負担の方が大きい。
颯斗などはむしろ自らのテリトリーとするための訓練を修めているが、妙子は耐えられない可能性もある。いくら≪死体≫が音にしか反応しないとは言え、闇の中を徘徊する姿は警戒に値するものだ。
気を配りすぎるあまりに、熟睡できなくてはいずれおかしくなってしまう。

「まあ、御別橋さえ越えてしまえば我が家もある。あの半要塞なら、しばらくは安全が確保出来るはずか……」

よしと頷いた颯斗が、後部座席の荷物を纏め始めた。妙子は、それを不思議そうに眺めている。
おそらく、車から降りるという発想そのものがないのだろう。当然だ。この中にいれば当面の安全は確保されるし、周囲には人もたくさんいる。集団心理にも似た安心感を、わざわざ自ら捨てる者は少ない。
ここが安全かなど二の次で、誰かといる温もりを求めているのだろうか。あるいは、戻ってこない日常の残り香へ群がっているのかもしれない。

「どうしたの？」
「これ以上は無駄でしょう。車を捨てます」

小回りの利くコペンの性能を生かして、縁石の上に片輪を乗せる。すぐさま後続車が間を詰めたが、結局それだけで動きは止まってしまった。
キーは挿したまま放置し、さっさと車外へ出て行く颯斗に妙子は慌てて習う。

「え、でも、どこに行くの？　このまま待ってれば渋滞だって動くかも」
「とりあえず、弓塚の道場を目指す。桧山さんの家族も、出来るなら拾っていった方がいい。家はどこに？」
「橋の向こう、大通りを少し行ったところだけど……」
「なら、そっちへ寄ってから我が家へ。保存食と頑丈な塀、運が良ければ化け物クラスの護衛もいるかな。それで、しばらくは凌げるはずだ」

行くぞと気軽に言って歩き出した矢先、どこの誰とも知らない人間がコペンに群がった。短い悲鳴と共に背中へ抱きつく妙子の手を掴んで先を急ぐ。
歩いている人も少なくはない。各々が荷物を抱えて、周囲に血走った目を向けている。
もし、こんな中で誰かが≪死体≫になれば、あるいは紛れ込んできたら、この通りだけでも相当な騒ぎになりかねない。
そうなったらはぐれる可能性もあるし、何より人の濁流に呑まれれば死ぬことだってある。

「裏通りを歩きましょう。ここは見通しが悪すぎる」

ええ、と生返事で答える妙子は未だコペンを気にしているらしい。次第に小さくなる車両を、ちらちらと振り返っている。
手近な路地から大通りに別れを告げ、微妙に暗い気がする道を進む。大通りからたった一本隣の道だというのに、静まりかえる雰囲気は気持ちが悪い。
一瞬でゴーストタウンに迷い込んだような錯覚を覚えるほど、人の姿も生活感も消え失せていた。
肩を強ばらせる妙子の手を強く握ってやりながら、颯斗は感覚を

尖らせる。
ここは既に≪死体≫どものテリトリーだ。気を抜けば、突発的な出会いにやられる可能性もある。

「少しお喋りでもしましょうか、桧山さん」
「え、でも音で集まってくるんじゃなかったの？」
「これだけ視界が確保できていれば、大声でも出さない限り問題ありません。普通に会話していれば、大声なんて出さないでしょうしね」

普通に会話をしている途中で、エアバックに悲鳴を上げさせられた少女は頬を膨らませた。あのときの恥ずかしさを思い出してか、若干顔が赤くなってもいる。
代わりに肩から力は抜け、握った手を強く握り返す余裕は出来たが。ついでに繋いだ手の感触で、何ともいえない表情になっていた。
ころころと感情の変わる姿に、くっくっと颯斗は喉を鳴らす。

「さて、何の話をしましょうか？」
「弓塚君が、実はすっごい皮被ってたって話」

どこかむすっとした顔の妙子に、颯斗は肩を竦めてみせる。
確かに、学校では気をつけて丁寧な言葉を使っていた。例外と言えば、昔から顔なじみな冴子くらいである。
特別友人や知り合いがいないわけでもなかったが、教室では基本的にぼっちの生活を送っていたのを思い出す。
端の席で読書をしながら時たま外を眺めつつ、春に微睡み、夏に干からび、秋に涼んで、冬に凍えていた。
懐かしい。年間を通して変わらなかったあの席こそ、聖地と言っても遜色ない場所だった。

「はて、皮を被るねぇ。包茎ではないつもりでしたが？」
「なっ――――――――！？」

刹那、上がりかけた非難の言葉を手で抑える。そして、妙子の後ろに立ち上がった≪死体≫の眉間を、大振りなナイフで穿つ。
顔の真横を通過した刃物に目を白黒させる少女へ、颯斗は人差し指を立てて静かにするよう合図した。
三つの≪死体≫が、数メートル横を通過していく。

「冗談のつもりだったが、女性には少し下品でしたね。申し訳ない」
「……」

ジト目を軽くいなして、颯斗は先に進む。その後ろへ続く妙子が、頬を僅かに膨らませる姿は可愛らしくもある。
とてもではないが、最上級生にして弓道部の長とは思えない仕草だ。
放された手を、今度は彼女から握り直して隣に並ぶ。特に早足でも慎重でもない普段通りの足取りで、二つの影は静かすぎる路地を進んでいく。
その間に交わされた話題と言えば、敬語の解除から始まり指の怪我を気遣って最終的には冴子との関係に行き着いた。二人はどういう関係なのかと聞かれても、颯斗には幼なじみとしか答えようがない。
しかし、それで妙子が納得する様子は欠片もなかった。

「そもそも、毒島さんの紹介でうちの部に出入りしてたじゃない。幼なじみってだけで、そこまでする？」
「と言われましてもね。あいつとは親同士の仲がよかった延長というか、文字通り腐れ縁というか。色っぽい話なんて出たことはありませんし、組み手がヒートアップしてお互いの顔面をボコボコにし

たこともありますよ」

女の子の顔を殴るなんて酷い！！　と一喝されたことに僅かな理不尽さを感じつつも、不意に飛び込んできた音を拾って身体が自動的に身構えた。

銃声だ。

それもハンドガンなんて可愛らしい音ではない。ライフル系の、大口径銃が発する音である。

続いて聞こえるのはエンジン音。小さな破裂音が連続するようなそれは二輪車特有のものだ。音源の移動速度を考慮すれば、どうやら派手に音を出すだけの改造バイクではないらしい。それなりの速度でもって、こちらへと近づいてくる。

「どうしたの？」

「バイクが一台、こっちへ来ます。一番手前の通りからかな？　進行方向から推測して、目の前を通過していきそうですね」

妙子が視線を向ける方からは、既に常人の耳でも聞き取れるほどの音が響いている。僅かに表情を堅くする彼女の同じで、颯斗は近付く音に眉間の皺を深めた。

バイクのエンジン音だけが近付いてくるなら問題はなかった。適当にやり過ごしてから、別の道を進むだけでいい。

だが、音は銃声も追うように付いてきている。オートマ四輪の静かな駆動音が、ここにきて他の音の隙間から僅かに顔をのぞかせていた。

腰の折り畳み式弓を展開して、矢を四本引き抜く。妙子には端で身を隠させ、代わりに颯斗は道のど真ん中で構える。

銃を持った車が、バイクを追い回していた。

街中を≪死体≫が歩き回るような状況だ。追い剥ぎという可能性は想定内で、むしろ生きた人間に危機感を覚えたからこそ裏道を通

ったわけだが。

「結局は、どちらもかわらなかったな」

嘲笑が口から漏れた瞬間、五〇メートル先の曲がり角を二人乗りのバイクが走り抜けてきた。乗っているのは男女で、ヘルメットも被っていない二人には見覚えがある。

バイクを追って、一般的な軽自動車が一台だけ角を曲がってきた。アスファルトにタイヤ痕を残すほど速度を出すそれも二人乗り。一人が運転、もう一人は助手席から身を乗り出して猟銃らしきものを構えている。

不意に、横滑っていた軽自動車が慣性に引っ張られるまま塀へと突っ込んだ。

助手席の男は吹っ飛ばされ、運転席の誰かもエアバックに圧迫され、車の前方の片輪に矢が突き刺さっている。

いつ放たれたのか常人ではわかるはずもない凶器に穿たれ、軽自動車と運転手は沈黙していた。おそらく、気を失ってしまったのだろう。

その近くに投げ出された男も、首だけが後ろを向いているので生きてはいまい。どこかへ飛んでいった猟銃も、探す暇はなさそうだ。

背後が静かになったのを確認するためか、はたまた弓を構える颯斗を警戒してか。バイクは一〇メートルほど離れた場所で停車した。

残念なことに、そんな中途半端な位置で止まっても無駄。十二分に殺せる範囲内で睨まれようと、一般人相手に恐怖を感じる気すらしない。

弓を折り畳み、矢を収納して敵対心の無さを証明する。

彼らは見た顔だ。特に、後部シートに座る少女とは顔見知りでもある。

「よお、宮本。無事だったか」

「……弓塚……」

宮本麗。本来なら颯斗と同じで、最高学年生なはずの彼女は留年生だった。

いや、より正確には留年させられ生とでも言ったところだろうか。いろいろとややこしい事情が絡まって、大人の事情が行き交う果ての結果である。

当時の彼女が担っていたのは、さぼり癖の激しい颯斗を教室へ連行する役。親の正義感を引き継いだ性格とは、一度大きな衝突をしたこともあった。

あまりいい思い出ではないが、あれ以降の関係は良好だったと思う。相変わらずの連行作業も、正義感からではなく友人としての気遣いだったと感じられる程度には優しくなっていて。ある日、突然呼びにこなくなった時の寂しさは今でも覚えている。

「そんな嫌そうな顔するなよ。ちょっと悲しくなる」

肩を竦めて見せる動作に、麗の表情がしかめられる。

後ろめたさからか、羞恥心からか。あるいは他にも理由があったからかもしれないが、彼女の留年が決まった日以降に顔を合わせるのはこれが初めてだ。

久しぶりに友人と顔を付き合わせれば、なんとなく心の底で安堵の気持ちが湧く。とても普通の人間らしい感情には困惑するが、この感覚は悪くない。

ほんのりと暖かい、心残りが一つ消化されたような気分だ。

「麗、知り合いか？」

バイクのハンドルを握る少年が、怪訝そうな表情で声を出した。

後ろで事故を起こした車が、どうしてそうなったか理解できてい

ない分類の警戒心だ。実際、この中で何が起こったのかを把握しているのは颯斗だけである。
妙子も麗も弓を使うときの彼を知っているからこそ、結果から何をしたのか予想出来ているだけに過ぎない。

「俺は三年の弓塚颯斗。毒島冴子のクラスメイトの方がわかりやすいかもしれんが。君は？」
「は、はあ……小室孝です」
「小室くんね。宮本の話で何度か出た名前だな。そうか、君が」

なるほどなあと納得する颯斗に、麗の鋭い視線が突き刺さる。どうにも、しばらく会わないうちに嫌われてしまったらしい。
軽く吐息して、端に隠れていた妙子を呼び寄せた。軽く三人をそれぞれに紹介して、世間話でもするように言葉を続ける。
お互いに欠片も近寄らず、一〇メートルの距離があいたままでだ。

「いやあ、マイクロバスに乗り込んだときは、一瞬のことだったから見間違いかとも思ったが。久しぶりじゃないか宮本」
「なんでマイクロバスのこと……あ、あのとき助けてくれたのは弓塚先輩だったんですか」
「ご明察だよ、小室くん。家がひっそりと弓術の道場をしていてな。弓は少しばかり得意なんだ。ところで冴――毒島と合流する約束しているんだが、居場所がわかったりするか？」

はいと喜作に答える小室曰く、東署の前で合流する予定になっているらしい。自分たちも向かっているところだと言うので、それに便乗させてもらう事にした。
終始無言の麗に苦笑を向け、近くの民家に停めてあった原付を拝借する。チェーンをナイフで潰し、イグニッションキーの部分を切り取って引き出す。あとは軽く接触さえあわせてやれば、簡単にエ

ンジンが火を噴いた。
どこか懐かしい曲が、耳の奥で響いている。
「さて、これで徒歩のペースにあわせる必要もない。一番近いのは御別橋かな？　そっちを目指していこう」
すげぇと感嘆の声を上げる小室を、後部座席の麗がつねった。
短い悲鳴を聞きながら、おっかなびっくりで後ろに乗る妙子を確認する。腰に手を回してしっかり捕まらせ、アクセルを徐々に絞っていく。
軽快な加速と音が、二重になって響きだした。

‡

冴子とは意外とあっさり合流できた。
橋が封鎖されていた、というのも原因の一つだが。何より一行の移動手段が、バスから徒歩に切り替えられていたのは大きい。
マイクロバスに乗り込んだ教員は二名だったはず。一人は目の前にいる鞠川保険教諭で、もう一人は生徒を見捨てようとした紫藤教師だった。
前者はともかく、後者の人物に関しては苦い思い出もある。何となく問題が起こる予感はしていたが、まさかこんな形になるとは颯斗もびっくりである。
御別橋と床主大橋の中間地点。その辺りで途方に暮れている顔見知りを見つけたときは、バスが駄目になったのかとも思ってしまったほどだ。
「よう、さっきは助かった」
「なに、こちらも助けられたのだからおあいこだよ」

お互いに苦笑を漏らして無事を確認しあい、どこにも不備がないことを安堵する。
この集団と合流して、一気に大所帯となってしまった。確かに生き残りが多ければ、それだけ人の社会は早急に復活するだろう。
だが、多くの生き残りを護るには相応の武力が必要になる。ここにいる人数分の安全を保障するには、二人だと心許ない威力であるのは否めない。
少し武器の補充もしたいし、一時的にでも安心して眠れる場所が必要だ。
じきにくる夜を、生身のままで過ごすにはリスクが高すぎる。

「橋は警官隊が封鎖していた。今日中に、俺の家へ行くのは難しいだろうな」
「ああ。君の道場なら、しばらくは持ちこたえられるのだろうけどね」

いっそ手薄なところを強行突破とか、颯斗の能力で作り出した混乱の中をこっそりなんて話し合いをしてる横で不意に声があがった。
緊張感に欠けるそれの主は鞠川静香だ。集中する視線を気にもせず、マイペースに提案を出す。

「もうすぐ夜になっちゃう。この近くに先生の知り合いの家があるから、今日はそこで休みましょう」

願ってもない提案だ。
道具の補充をする間、安全に立てこもっていられる場所があるのは有り難い。しばらく留守にしても問題ないほどの強度があるのなら、十分に僥倖といっていい収穫である。
いくつかの質問をして、地理的な情報を分析する。
場所は床主大川沿いのメゾネット。入り口に高低差もあるらしく、

人の背よりも高い塀付きだそうだ。
十分すぎる立地条件である。文句などあるわけもないので、殊勝に頷いて同意する姿勢を見せた。
「じゃあ、俺たちのバイクと原付で先行しよう。いいですか？　弓塚先輩」
「ああ、問題ない。全員が到着するまでには、安全の確認を済ませておこう」
「それならば、私も同行した方がいいのだろうね」
孝の後ろへ鞠川が乗り、当然のように原付へ乗ろうとしていた妙子の動きが止まる。
後続の安全を守れる麗とコータにいくつか言葉を預け、密着するように二人が乗り込む姿を見て再起動した。
「あ、え？　なんで毒島さんが行くの？」
「実力の問題だよ。桧山君は、後からゆっくりと追いついてくればいい」
にっこりと微笑んだはずの冴子の表情を、何故か挑戦と受け取ったらしい妙子が睨んでいる。
面倒だと小さく息を吐いた颯斗は、問答無用でアクセルを回す。
急発進に反応できなかった妙子が声を漏らし、逆にしっかりと反応した冴子は抱きつくように手を回してきた。
背後で何か叫び声が聞こえるも、全部カットして先を進む。
後から追いついてきた孝と鞠川に前を走らせ、後ろを付いていく形で走行する。
「ずいぶん桧山君に懐かれているようだね」
「まあ、吊り橋効果だろ。俺が助けたから、英雄視の可能性もある

が」

ふぅんと、どこか含みのある返事の声を遮るために速度を上げた。音が背後に流され、これ以上は取り合わない意志を汲み取った彼女も黙ってしまう。

前で楽しげにしている孝と鞠川が羨ましい。

なまじ長く一緒にいるだけ、この静寂ですら冴子には何かを読みとられそうな気がする。

また、小さく息を吐いた。

一瞬でどこかへ消えてしまったそれを探して、顔半分で振り返って視線を背後へ向けてみる。

見えるのは死んだ世界。そして、背中にしがみつくいい女が一人。

吐息ぐらい何度だって出そうだ。平和で退屈な世間を享受していたというのに、今さら弓塚の特技が役立つ世界になられても困る。

歩いてすぐの場所よと、鞠川が公言しただけあって知り合いの家とやらは近かった。あらかじめ聞いていた条件にも、ちゃんと符合している。

唯一の違いと言えば、駐車場に止めてある車の事だろうか。大きな車とは聞いていたが、てっきりバンかワゴンだと思っていた。

「まさかハンヴィーだとは……とんでもないな」

戦車を思わせる重厚感の車体は、もう見た目だけで人を威嚇している。

流石に銃座は付いていない。

むしろ装備されていたら持ち主を警戒しなくてはならなくなるが、そもそも一般人が普通に手を出すような車ではないのだ。同じ値段をつぎ込むなら、もっと見栄えや無意味なエコ性能付きの物を買うだろう。

少なからず、このハンヴィーはエコにほど遠く見た目も厳つい。

「さて、じゃあ。そっちの二人は任せた。俺は中の掃除をしてくる」
「手助けはいるか？」
頭を振って矢籠（しこ）と弓を冴子に渡し、両脇の下に吊っていたナイフを閃かせる。両手で鈍い光を宿す刃物に呼応して、建物の中にいる気配が動いたような気がした。
静かに、どこまでも音を消して飛ぶ。弓塚の技術を押し込められた体が、考えるよりも早く手足を支配する。
心を殺し、精密に動く機械が全てを支配するが如く。高い塀を軽々と越え、殺すべき≪死体≫たちを視界に捉えた。
「いいんですか、毒島先輩？！」
孝が慌てた声を漏らし、塀の向こう側を確認しようと動きまわっている。同じようにおろおろしている鞠川も、冴子に何か訴えかける様な視線を向けた。
二人分の視線を受けて、それでも彼女は取り乱さない。
預かった装備を丁寧に持って、困ったような笑みを作る。
「大丈夫だよ、小室君。颯人なら心配ない。彼の家系はちょっと特殊なんだ」
殺し屋の家系、などとどう説明すればいいのか。ここにいない本人を僅かに恨んで、困った様な表情になる。
普段では見られない、眉根の下がった困り顔に孝も鞠川も更なる困惑を色濃くした。
‡

ガラスが砕かれ、通気性の良くなった窓から体を滑り込ませる。音もなく着地した場所は、ソファやテーブルの他に小物が散乱している部屋だ。
おそらく居間だろう。間取りの全てを把握していないのは不安要素だが、この辺りのメゾネットはだいたい同じ構造を元に建設されていたはず。典型的な一般家庭の間取りをいくつか思い浮かべ、一番類似しそうな図面を思い浮かべた。
その構造で合致する事はないだろうが、それを元にして掃除の順番を決定していく。
暗い瞳が見据える先で、二つの≪死体≫が呻いている。気配を探る限り、目の前のも合わせて一〇前後の気配が動きまわっているようだ。
先ずは目の前から。
一息で≪死体≫までの距離を詰め、直線の軌道で左の刃が眉間を穿つ。体を旋回させて刃を引き抜き、一体目が倒れるよりも早く回転の速度に載せて真上から刃を振り下ろした。
ばっくりと頭から顎までの顔が切り開かれる。吹き出す温かい液体と脳髄を浴びて、気軽に散歩する感覚で奥に進む。
歩く音など微塵も存在しない。気持ち悪いほど滑らかな動きで、幽霊の様な影がするすると前進する。
背後に現れた≪死体≫へナイフを投げ、正面の≪死体≫を切り刻む。不意に飛び出してきた≪死体≫の眼球へ、鉄籠手の保護がある右手指を突き刺す。
ただ殺すだけだ。既に死んだ≪死体≫を、もう一度殺すだけの簡単な仕事。
一つっきりの得意分野を駆使して≪死体≫で死体の山を作るだけ。
わざと壁を蹴って音を立て、そこに集まってきた得物を背後から殺す。
首を捻り折って動けなくなったモノを投げ飛ばし、別の≪死体≫へ叩きつけて自由を奪う。

死んでいようが生きていようが、斬られて動けなくなる場所はさして変わらない。
切断して、折って、極める。解体なんて綺麗な殺し方は出来ないが、確実に死ぬだろう場所を機械的に切り刻む。
すでに一つの殺人兵器といってもいい。むしろ、そうなる為の調整こそが弓塚の技法だ。
殺すだけなら、ただの武道でも可能である。淡々と殺し、着々と排除する。
そんな機械人形へと成り下がるのが、彼の家で当主となる意味。
殺すという行為に関してだけなら、歴代でも最強クラスと称される颯人。だからこそ、彼は――自分は――次の当主（操り人形）に抜擢されているのだ。

「……」

ぽとりと、指先から赤い雫が落ちた。
手には赤黒い色が染みついて、鉄錆の匂いに鼻が犯される。
全て、自分がもっとも嫌ったものだ。家系も当主の地位も含めて、こうなりたくないと思ったものが今一番役立っている。
皮肉だ。
親を軽々と飛び越え、殺すことのみなら歴代最強とまで言われ。しかし、何一つ嬉しくなかった能力が唯一の手段になっている。
心を冷水に浸し、思考の内容をカット。必要な選択肢を、なんの躊躇いもなく選べる機械的な意志を再起動させる。
室内の気配は、既に沈黙していた。この≪死体≫たちの良いところは、気配を消して潜んだりしないことだろう。見つけるのも、完全排除の確認も楽で有り難い。
二階への階段を上り、一応の確認作業も終えたところで外の声が増える。丁度、後から追ってきた妙子たちが合流したのだろう。
ベランダへ出て、手を振る一同を見る。

全員が無事にたどり着けたらしい。これで、今夜は留守にしても何とかなりそうだ。
門扉を開け、敷地へと入り込んでくる彼らの正面めがけて飛び降りる。いや、より正確には、唯一『庭を歩き回っていた≪死体≫』めがけて落下した。
脳天へとナイフを突き立て、猫のように軽やかな着地で一同の前に降り立つ。

「中の掃除は終わっているが、隅々まで目視で確認してくれ。ついでに片付けもした方が良さそうだったよ」

血みどろの男が肩を竦めて笑う姿は、いったいどういう風に見えるだろうか。
表向きの隠れ蓑である弓術のことしか伝えていないのだから、彼らへは嘘を吐いている事になるのだろう。まさか、殺しの家系ですら『歴代最強』なんてレッテルを貼り付けて扱いに困っている存在だとは思うまい。
もし知ってしまったら、きっと彼らはもっと困ってしまうはずだ。だからこそ言わない。例え、疑念を持たれたとしても黙して貫く。せめて安全な場所へ着くまで、それまでは我慢してもらうしかない。ようやく、この醜悪な技能が役立つ日が来たのである。
存分に振るわなければ、何の意味もない。
刃物を仕舞い、弓の装備一式を冴子から受け取る。心配げな表情に笑顔で応え、先に屋内へと入って細かく確認を始めた。
これが終わったらシャワーを浴びよう。そう心に言って、三度機械の意志を起動させた。

Dead of four「生贄」（前書き）

求めるならば
支払わなければならない
得るのならば
支払わなければならない
それらには、覚悟が付き纏う

Dead of four「生贄」

全てが闇一色になると、その輪郭がはっきりしてくる。おぼろげだった現実は容赦なく突きつけられ、今生きている場所に嫌悪感すら抱いてしまいそうだ。

神も仏もいやしない。どこまでも残酷で凄惨な、あるいは過酷な光景がそれを物語っている。

例えば床主市の歓楽街。いかがわしい店のネオンが通りを彩って、いつもなら千鳥足の酔っ払いが歩き回る場所。今、のろのろとした足取りで行き交うのは≪死体≫たちだ。

いや、少し前に合流した小室らの言葉を借りるなら≪奴ら≫となるのだろうか。それでも通じないなら、殺人病と言ってもいい。

呼び名がどれほど変わろうと、所詮は生き残るために除外するただの障害物だ。頭を潰し、動かなくなればそれで問題ない。

吐息。

重い足取りで、横を通過しようとする≪奴ら≫の頭を叩き潰す。

今ごろ、彼らは疲れて眠りこけているだろうか。いや、冴子と男二人は起きているかもしれないが、そんな事はどうだっていい。

心配なのは彼らの良心だ。

冴子だけなら心配することもなかっただろう。しかし、今は彼女だけではない。

今の状況で、誰かを助けたいなんて考えるのは自殺行為である。それを実行するには、かなりのポテンシャルと火力が必要だ。

事実、颯斗も今の人数を守るので手一杯。あと増やせて二、三人が限界だ。

彼らが戦力を得ることで、多少は楽になるかもしれないが。それもたかが知れている。

いざという時の対処など、冴子ですら出来ないかもしれない。

「考えていて不安になってきたな」

メゾネットは目の前だが、拾ってきた装備を担ぎ直して足を早める。

試し振りは、もう十分だろう。さっきの≪奴ら≫でちょうど二〇体目だし、感覚も戻ってきた。

金具を外して折りたたみ、腰に装着している弓よりも上の背中へ納める。

だんだん装備がごてごてしてきたが、それも家に帰れば必要な物だけに交換できるだろう。

走る毎に、背中で装備ががちゃがちゃと音を立てる――なんて愚行は犯さない。暗殺の技術を応用して、気配を遮断するような移動を開始する。

振り向きもしない≪奴ら≫を完全に無視して直進。次第に道いっぱいに死体の影が見え始めたところで、仕方なく進路を『塀の上』へと変更した。

猫のように細い足場へ軽やかに着地して、平均台で演技する新体操選手もかくやという速度で疾走する。

刹那、遠くで二つの音が爆発した。

バイクのエンジン音と、ライフルクラスの銃声。この致命的な両者を、彼らが出した証拠はどこにもない。

実際に猟銃を派手にぶっ放していた青年を途中で見たし、バイクなんてそこら中に転がっている。まったく顔も知らない赤の他人が、勝手に自滅するならそれでもいいだろう。

だが、自分の所属する集団が死に急いでいるというのなら――

「大人しくしていろと言ったのにな」

舌打ち一つに留めて、内心の悪態を飲み込む。

健気に人助けでもしようと思ったのか、あるいは感情に任せて打って出たという可能性も捨てきれない。
呆れるほど莫迦な集団だ。他人など無視して、自分の安全だけを考えていれば良いというのに。
道を埋め尽くす≪奴ら≫の密度が、さっきの倍近くまで膨れ上がっている。あれだけ音を出せば当然だ。さっさとこの地域を抜け出した方がいいだろう。
更に足へ力を込めると、同時に二度目の音がはぜる。
金属の擦れる音。二輪の何かが軋む音。予想と仮定を混ぜて言うなら、小室の載ってきたバイクが横転する音か。
かなり近い。おおよその距離は、五軒先といったところだろう。更に先の家屋から、マズルフラッシュの瞬きも見て取れる。
もはや≪奴ら≫は足下ですし詰め状態だ。異常な腕力の事を考えれば、塀だって押し崩せるかもしれない。
バイクの破砕音がした家まで、もう距離にして五メートルほどだ。右手を背中で蠢かせ、金具を外して凶器を引き抜く。
構えるのと展開するのは同時だ。振り回した遠心力を利用して、鉄と鉄の間接を噛み合わせる。
二つ折りにされていた凶器が、バチンと音を立てて分厚い斧頭を立ち上がらせた。最後の距離を、一息で跳躍して無に帰す。
深く膝を折って衝撃を逃しながら着地した瞬間、少し前で火薬が炸裂した音が響く。これでまた、よりいっそう≪奴ら≫を集めたことになる。

「くっ、厄介な事を」

リコイルショックに煽られて硬直している小室の向こう。庭の端っこで、まだ二つほどの影が呻いている。
地面すれすれの超低空を飛翔する鳥のように、鋭さすら感じられる速度で距離を詰めた。

一閃。
移動のエネルギーを殺さずに振り抜かれた一撃が、右から左へ脳髄を抉った。更にそこで止まらず、体を一回転させて遠心力の乗った一撃を上から振り下ろす。
右脳と左脳を切り分けられた≪奴ら≫は、頭を輪切りにされた≪奴ら≫に続いて地面に沈む。

「無事か？　小室君」
「弓塚、先輩？」

半ば呆然としている彼に苦笑いを返し、狙撃者に向かって大きく手を振る。誰がやっていたのかは知らないが、いい腕だ。
あの距離だというのに、そこで転がっている死体は殆どヘッドショットで片付けてある。

「まったく、無茶をする。女の子を助けたいのはわかったが、危うく自殺物だ。冴子が付いていながら、こんな事を許すなんて」
「ま、待って下さい。毒島先輩は悪くない。僕らが勝手に助けようと――」
「関係ない。あれは君らよりも圧倒的に強いんだ。何より、任せたと言って出てきたはずなんだがな」

斧を突きつけ、見失った言葉を探す小室の視線を集中させた。
困惑の表情がある。それもそうだろう、ただの学生が暗闇の怖さを知っているはずがない。夜に戦うのが、いかに賭かを知るのは戦闘能力がある者だけだ。
小さく息を吐いて斧を下ろす。それから庭の端で縮こまっている少女を見て、外に殺到している≪奴ら≫を見る。
玄関から普通に出て行くのは無理そうだ。むしろ、いつ門が限界を迎えるかの方が怪しい。

こうなっては、手段を選んでいる余裕はなさそうだ。

「助けたんだ、その子は責任を持って連れて行け」

「はいっ！　あー……でも、外がこれじゃあ」

思わず吐息が漏れ出した。

バイクを使った時点で、こうなるのは予想できた気もするが。助けに来なかったらどうするつもりだったのだろう。

「塀の上を歩いていけ、殆ど≪奴ら≫の手は届かない。こっちで多少は引き受けるが、出来るだけ早く冴子たちと合流してここを離れろ」

「え？　引き受けるって」

いいから動けと急かして、小室に少女を背負わせる。ついでに、なぜか犬も服の中に突っ込んで塀の上まで引っ張り上げた。

遠く、ハンヴィーが停めてあった駐車場で慎重に動き回っている影がいくつかある。

小さな物音に気付いて、そちらへ向かおうとする数体の≪奴ら≫を射殺しながら小室に頷きかけた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、問題ない。おっと、これは死亡フラグだったか？　それよりさっさと行け。川を渡るんだろう？　水の中に入るのは明るくなってからにしろ、足を取られるぞ。俺も、それくらいまでには追いつけるようにする」

硬い表情で頷いた小室を送り出し、背中が遠くなった所で足元にある門を破壊する。斧の一振りで開け放たれた入り口をくぐって、次々と≪奴ら≫が民家になだれ込む。

少女を背負わせるとき、小室は白いシャツと花を中年男性の死体に捧げていた。
死因は刺殺。胸の辺りに刺された傷がある。
少女と交わしていた声は聞き逃したが、おおよその見当は付く。賢い選択ではあるが、報復というデメリットを忘れていたのが落ち度だろうか

「犯した罪は、同種の罰を受けることでしかあがなえない。バーイ、俺」

喉を僅かに鳴らして、塀の上を悠々と歩く。
斧の刃を引きずり、鉄が軋む嫌な音を響かせて笑う。
背後で、ハンヴィーの方向転換する音が聞こえた。そこに混じって、一家族分の悲鳴も僅かに鼓膜を揺らす。
肩が揺れているのは、斧を引きずっているせいだろうか。あるいは、もうずいぶん昔に壊れてしまった感性のせいだろうか。
わからないまま、口の端をバックリと引き裂いた颯斗は細い道を歩いていく。

‡

空がだんだん白みだしてきた辺りで、ようやくハンヴィーの影を見つけることが出来た。
起きて見張りをしていたらしい冴子が、こちらを見て安堵の表情を浮かべる。

「無事だったんだね、よかったよ」
「誰に向かって言ってるんだ、これでも弓塚の人間だぞ。この程度の荒事なら、親父殿と組み手をしている方が危うい」

確かに、と肩を揺らして同意する幼なじみへ苦笑いで答えた。
増水していた川は穏やかな表情を取り戻し、これくらいなら車両ごと通過できそうな雰囲気である。それでも、深みの確認などはしておきたい。

「全員が起きるまで、まだしばらく時間があるな。少し川底の様子を確認してくる」
「確認？　川の中へ入るのか？」

上着を脱ぎながら、ああと頷く。念のために斧は折り畳んだ状態で腰に固定し、川底の状態がわからないので靴と制服のスラックスは着たまま水に入る。
水嵩と勢いはましになっているが、足下は濁っていて見渡せない。何か言いたげな冴子を一瞬だけ振り返り、そのまま無言で前に進む。
三分の一も歩けば、川の水が鳩尾まで浸水してきている。流れもかなり強い。
だが、特に足下は問題がないようだ。尖った物を踏んでタイヤがパンクする事もなければ、窪みに落ちて身動きが取れなくなることもないだろう。
この辺りの川はカーブもしていないので、川底は典型的なV字型だと思って問題ないはずだ。最大で肩が浸かるレベルの水位なら、ハンヴィーが通るのは余裕ということになる。
見えない足元をさぐり、重量のある岩を見付けては足をひっかけながら進む。流される一歩手前くらいの危うさの中、何とか向こう岸まで辿りつけた。が、到着点からはかなり逸れてしまったらしく直進したとは言えない状況である。
右斜め向かいで手を振る冴子に返事を返し、小さく息を吐き出す。
結局、水位は鳩尾よりも上にくることはなかった。心配だった川底のゴミも、どうやら増水で押し流されてしまっているらしい。これならば、ハンヴィーがパンクする事もなく通過できるだろう。

「あとの問題は、周辺の状況か。出来れば≪奴ら≫がいないかくらいの確認はしておきたいな」

腰の斧を展開して、ずぶ濡れのまま堤防を登る。

川岸にはそれらしい姿が一つも見えないので、もうこの辺りは誰もいないのだろうか。音に反応する≪奴ら≫は、人が移動する音に吊られて追いかけていく。

もし、ここに人がいないのなら。それは逆に安全であるという証明になる。もちろん、孤独と言う不安感を代償に支払う必要はあるが。

位置確認のためにもう一度、目を凝らして周囲へ視線をさまよわせる。

ハンヴィーを探して、わりと適当に歩いてしまった。床主大橋からどれくらい離れているのか、今はおおよその距離しかわからないのが実状だ。

河川敷に装備を埋めた記憶もあるので、可能なら回収しておきたい。

「安全面は大丈夫そうだが。う、ん？　どこに埋めたんだったか。もう少し下流だったか？」

動物バラエティ番組でやっていたリスの生態を、莫迦じゃないかと思いながら観ていた記憶が思い出される。実に無様だ。

空は、まだ太陽の頭が少し出たくらい。時間にして六時前後と言ったところか。彼らが起き出して来るには、もうしばらくの余裕があるだろう。

対岸でじっとこちらを見る冴子に手を振り、下流の方を探索する旨を身振り手振りで伝えてから歩き出す。タイムリミットは、掘り出すことも考慮するなら三〇分ぐらいがいい。

体内時計のタイマーをセットして、颯斗は鋭く地面を蹴り抜いた。

‡

ボストンバックを担いで戻ってくる頃には、ハンヴィーが既に渡河し終わっていた。誰かが落っこちた様子もなく、川底を調べたかいがあったらしい。

むしろ、そんな事よりもラッキーだったのは女性陣が着替えていたことだろうか。距離にして二〇〇メートルは離れているが、颯斗の目ならはっきりと見える。

ハンヴィーは挟んで反対側にいる孝たちでは見えない花園を、たっぷりと拝見させて貰った。眼福だ。

「おはよう。全員無事そうで何よりだ」

とりあえず、着替えが完璧に終わるまで待ってから登場する。気軽に手を挙げたつもりだったが、冴子以外の全員が呆然とした表情を向けて来た。

まるで、幽霊でも見たような表情と言えばいいだろうか。目の前の光景を、信じられないかのように指さしている者さえいる。

「足はあるからな？」

ツインテール眼鏡の少女は、確か高城という名だったはずだ。その横のぽっちゃりしている少年が平野。小室に宮本、鞠川から冴子に視線を移して幼女へとたどり着く。

昨晩に小室が助け、一晩で肉親を失った少女だ。しゃがみ込んで視線の高さを合わせ、柔らかく笑む。

「初めまして、弓塚颯斗という。君の名前を教えてくれ」

「ま、希里ありす、です」
「ありすちゃんか、いい名前だ。緊張しなくてもいいよ？　何、任せてくれればすぐにでも気持ちよく――」
問答無用で、左右から木刀と銃剣が突きつけられた。どうやら、軽い冗談に必殺級のツッコミを入れられるくらいには回復しているらしい。
両手を挙げて無抵抗を示しながら、ゆっくり後退して脱いだままの服を受け取る。今すぐに上半身の裸体を仕舞えという脅しのこもった視線に従い、いそいそと学校指定のブラウス閉じて学ランを羽織った。
「相変わらずみたいで安心したわ」
「はン、ようやく会話する気になったと思ったらそれかよ。もう少し気を利かせてほしいな」
やれやれと首を振れば、宮本はにこやかな表情で銃剣を振るので逃げる。無闇に刃物を振り回すなんて危なすぎだ。
担いでいたボストンバックを下ろし、アクロバットな走行で堤防を駆け上がるハンヴィーを見守っていると、背中に衝撃が生まれる。
腕が回され、胴回りを完璧にホールドした状態で背後の声がいう。
「よかった、無事で……」
「ああ、桧山さんも無事でよかった。メゾネットのときは、ろくに話す時間もなかったからな」
既に川の水気は乾いたはずなのだが、背中に僅かな水分がある。暖かくしみる、優しい水滴。振り返り、人差し指で妙子の目尻から涙を弾いた。
顔を近付け、大丈夫、大丈夫だと声を掛けて泣きじゃくる少女を

あやす。だが、それくらいでは満足できないらしい。よりきつく抱きつき、彼女の方から更に距離を縮めてくる。
緩やかに接近してくる唇と、ほんのり上気した頬。整った容姿も相まって、妙子がたまらなく愛おしい存在に見えてきた。
あと数センチ。それだけ近付けば重なる唇は――

「準備が出来たそうだよ。出発するから、その辺りで中断してくれないか？」

突然割り込んできた声によって、雰囲気ごと全てが斬り伏せられた。
顔を真っ赤にして飛び退くように離れた少女から、何やらしてやった顔の幼なじみに顔を向ける。
確かに、見上げれば堤防を登ったハンヴィーの用意が出来ているらしい。叫ばずに小室が手を振って合図してくるのは、おそらく≪奴ら≫への対策だ。
軽く手を振って返事としつつ、再び冴子の顔を見て。

「ヤキモチか何かか？」
「まあ、そんなところだよ」

ふふと笑みを漏らす本人曰く、昔から一緒にいるいい男を横取りされるのは嫌らしい。これが終始笑顔でなければ、少しは可愛げもあったのだが。
複雑な表情で視線を鋭くする妙子を見て、思わず吐息が漏れそうになった。

「オーケー、わかった。なら、これからお前らは平等に扱うことにしよう。どちらかと唇を重ねれば、もう片方にも同じ事をしよう。夜中に熱く愛を語らうなら、二人同時にお相手しよう。まあ、もっ

ぱらどちらにも手を出さないという選択肢を貫かせてもらうが」
やはり微笑で言葉を受け止める少女と、顔色を変えるのに忙しい少女へ手を差し出す。妙子、冴子、とそれぞれの名前を大事に発音しながら、手を取って自分の方へ引き寄せる。
人の体重が羽のように軽いなんてことはないが、両者とも運動部だっただけに引き締まった身をしていた。抱えたまま堤防の上まで行くのが楽でありがたい。

「まあ、トライアングラーな関係の進展どうこうは気長にいこう。なんせ、今の俺らには死にたくなるほどの時間がある」

皮肉気に口角を吊り上げて笑う颯斗の声は、この三人にしか届かなかった。
不思議そうな表情のメンバーをハンヴィーに押し込み、先へ進むように促す。そうして進み出した車内で、颯斗はさっそく両側を冴子と妙子に抑えられていた。拾ってきた装備の組立がしたいので、努めて無視しつつ作業を開始する。
ボストンバックの中身は、いくらかのパーツで構成されていた。カーボン製のストックとそこから伸びるフレーム、取り付け式の先端部は三日月のように弓形だ。底部に大きな溝があり、そこへ装着するのだろうドラム型のカートリッジが四つほど転がっている。他には、真空パックに保管されたガスボンベが二本。
平野の判断で、メゾネットにあったというボウガン・ロビンフッドを持ってきてくれたのは助かった。いくななんでも、この手の装備を埋めて保管するのには限界があるのだ。
工具箱の中からスパナを引っ張り出しつつ、流用できそうな部分を選び出す。

「ほう……昔から、颯斗の手先の器用さには驚かされる」

「あら、毒島さん幼なじみの割に今更ね。いっつも弓道場の的を張るの、颯斗君が一番上手なのよ？」

不自然な笑顔のまま冷戦に入ったらしい両国を無視して、照準に狂いがないかの測量をしていると、その延長線上に平野の顔が飛び込んできた。

無駄に輝いている目は今の作業に興味があると言うより、むしろ異様なボウガンそのものが気になるらしい。パウチを空けて中のガスボンベをセットし、ドラム型のカートリッジを装填したところで声が来た。

「先輩、それってどんな武器なんですか！？　見たところボウガンみたいですけど、弦も付いてないし！！」

「あー、ちょっと落ち着け平野君。これは一昨年くらいに、女の子と観た映画で使われてた武器だよ。面白そうだと思って再現してみたんだが、ってあれ？　なんか両側から殺気が」

女の子と映画？　という呟きが聞こえた気がする。

今、両側の二人がどんな表情かなんて確認したくもない。とりあえず、武器でテンションが上がっていたはずの平野を黙らせるような表情なのだろう。想像したくもない。

そもそも女の子と映画なんて言ってみたが、実状は弓塚分家の小学生どもを連れて観にいっただけのこと。冴子に関しては当時のことを知っているはずなのだが、もしかするとこの雰囲気を楽しんでいるだけなのかもしれない。

もう言い訳をするのも面倒なので、カートリッジとボンベをボウガンから取り外してボストンバックへ仕舞う。いつ使うことになるかは知らないが、映画の中と違って一回りも大きくなってしまった代物は小回りが利かない。

ガス圧式を採用したらこの様なのだから、あまり笑える話ではな

いが。小室のイサカＭ３７といい勝負なサイズというのは問題があるだろう。持ち運びにも向かないし、あるかもわからない次回の改修課題といったところか。

思考を変な方向へ逃がし、ふと前を見る。

最初は影もなかった≪奴ら≫が次第に増えているのは、この先に何かあるからだろうか。先ほどから、高城の指示で角を曲がる回数が増えつつある。

そもそも彼女の家を目指しているらしいので、水先案内を任せるのは妥当な判断だろうが。しかし、状況が少しずつ変化してきているようにも思う。

「多いね」

「ああ……」

無意識に背中の斧と弓を確認していたところに、やはり木刀を握りしめる冴子の声が切り込んでくる。

まだ心配するレベルの量ではないが、あるいは車体の上に出ている小室と宮本を呼び戻した方が――

「だめよ、だめ。停めてぇぇ！！」

瞬間、頭上から声が響いた。

進行方向を≪奴ら≫にふさがれたせいで、視界が悪くなっていたのは純粋な不運だ。それで誰かを責めることは出来ないだろう。むしろ、真っ先に気付くべき自分が反応できなかった事の方が情けない。

車体を横に向けろと叫ぶ冴子と、衝突に備えて体を丸める妙子の間で颯斗は動く。

右側へ放り出されるような慣性を無理やり押さえつけ、キャビンへ捻じ込むようにして体を押し上げる。

視界に飛び込んでくるのは、姿勢を低くして耐えている小室と宮本の姿だ。なかなか止まらない車体から振り落とされないよう、歯を食いしばって金具に掴まっているらしい。
視界の端っこに、ワイヤーと思われるバリケードが見える。ということは、これ以上ハンヴィーが無理に進もうとすれば車体を輪切りにされる可能性もあるということだ。
僅かに動きが停止する。
ワイヤーを切断するのが先か、それとも目の前の二人を車内へ引っ張り込むのが先か。その僅かな時間が、状況を更に進めていく。
足元で、タイヤがロックされていると叫ぶ声があった。
タイヤがロックされている状況から脱するには、いったいどうすればいいか。
簡単だ。アクセルを踏めばいい。

「しまったっ！！」

右脇腹をキャビンの出入り口にごりごりと削られるのも無視して、一気に腕を伸ばす。同時に車体が爆発的な威力を産み、背中を強かに打ちつけた。
鞭打ちのようになる体を強引に動かし、小室の足首を掴む。そして、続くようにやってきたのは急ブレーキによる衝撃である。
慣性によってキャビネットの淵に腹筋を叩きつけられつつも、その目を閉じることなく正面を見た。いや、閉じられなかったという方が正しいのかもしれない。
足を掴んでいた小室の体は、まだハンヴィーの車体上にある。だが、宮本の体は僅かに浮いていた。
数秒先に起こるだろう悲劇が脳内に溢れ出し、何かを考える前に反射運動が筋肉に命令を送り始める。
掴んでいた足を引っ張りながら、足に力を込めて二倍の推進力を作り出す。

小室の安全も考慮しながら、落ちていく宮本を追うように空へと飛び出した。
手を伸ばす。届けと手を伸ばし、服の端を掴むと同時に全力で引き寄せる。
素早く体勢を入れ替えながら、背を丸くして――一つ目の衝撃は、おそらくフロントに突っ込んだものだ。二つ目はもうどこだかわからない。
視界も三半規管もぐちゃぐちゃになって、どっちが上かの判別をする余裕すらなくなっている。

「か、ふっ」

固い物が鳩尾と眉間を抉ったところで、そういえば宮本がスプリングフィールドＭ１４を抱えていたのを思い出した。銃剣部分が刺さらなかったのは、不幸中の幸いと言えるだろう。
ぐらぐらする視界の中で、誰かが呼ぶ声を聞く。
声の主を特定する事など出来ないし、何を言っているのかすらわからない。だが、体はこういう状況でも反射的に動いていた。
もぞもぞと腕を動かし、背中の斧を取り外して声を張り上げる。

「さ、えこ！！」

歪んでいる視界の中に、夜色の長い髪を見付けだす。手の中から重みが消えたという事は、そちらへ向かって投げたのか彼女が取りに来たのか。どちらかを判断するための余裕が、脳みその中に存在していなかった。
脳震盪。視界の端が暗くなりつつある中で、何とか意識を繋ぎながら状況を吟味する。
そもそも、宮本が無事なのかも分かっていない。背中の痛みが、少しは彼女のダメージを減らせたという証拠になるだろうか。

更に暗くなり始めた視界の中で、何かの影が近付いて来る。誰だ？　と思うよりも早く、頭から水が降り注いだ。
即座に意識は現実へ引っ張り戻され、泣きそうな顔でボストンバックと空のペットボトルを抱えた妙子が立っている。

「立って！！　立って颯人君！！」

音が帰ってきた。
近くでスプリングフィールドＭ１４が、セミオートで火薬を燃やす音が響く。僅かに離れたところで、イサカＭ３７の銃身が火を吹いている。
そして、木刀と斧で《奴ら》を殴打する冴子をＡＲ－１０の射撃がフォローしているらしい。ここまで辿り着くだけで足が竦みそうになる彼女の向こうに、戦場が広がり続けていた。
手を伸ばす。

「よくやった、流石だな妙子。思わず愛おしくなりそうだ」

こんな時でもぴくりと肩を跳ねあげて反応する可愛らしさに、こみ上げる笑いを堪えながら手を伸ばす。
ジッパーを一気に引いて中の凶器を取り出せば、組み立ては一瞬だ。
ガスボンベをセットし、ドラム型のカートリッジを取りつけて半回転させる。がちりと金属の噛みあう音を聞きながら、揺れる体を起こして引き金を絞り込んだ。
殆ど無音で、長さ十五センチほどの杭が飛び出す。それも、単発ではなくフルオートの連射状態でだ。
一つ一つの威力は、たかが知れている。銃弾のように人体を貫通出来ないし、連射速度だってマシンガンに比べれば見劣りするだろう。

だが、下手に銃弾をばら撒くだけのフルオートと違い、十分に発射間隔の空いた連射は既に連射とは呼べないかもしれない。
発射と発射の間に、照準を済ませるだけで外れることのない連射が完成していた。
未だに揺れる体は、後ろから抱きつくようにして妙子が支えてくれている。あとは、狭まる視界を無理やりにでも広げて指を引けばいい。
空になった一つ目のカートリッジを投げ捨てて、二つ目のドラムを蹴り上げた。右腕を振って空中で無理やり装填し、半回転させて噛みあわせる。
どれだけ撃ったかも分からない。やがて視界が暗転する中で、水圧に押し流される《奴ら》の姿を見た気がした。

Dead of five「後悔」（前書き）

振り返る
そこに何があるか知っているから
振り返った
目を覆いたくなるほどの絶望を見るために

Dead of five「後悔」

両手で抱く彼女たちの体温が、次第に冷たくなりつつある。
そこは赤かった。視界の中、その八割が血液に覆われていく。
赤の海は、畳へ染み込み、手にこべりつき、凶器の銃を沈める。
そうして最後の自己主張を果たし絶えていった。
わからない、という意志だけが残っている。
どうしてこうなったのか、理解したくないという戸惑いが邪魔している。
だから、心の均衡を保つために、颯斗は冷たい心を起動した。
もはや、涙すら流れない。

‡

目が覚めると、そこは室内だった。
仰向けの視界に入るのは、見たことのない天井だ。真っ白で清潔感あふれるそこには、華美ではないものの高級品だろうと思われる照明が一つ。目に優しい暖色の光を生んでいる。
やたらと柔らかいベッドが、背中からここ数年で感じたことのない心地よさを伝えており。朝の微睡みにいるような、ちょうどいい気だるさに体を支配されていた。
どれくらい寝ていたのだろう。現状、死体となって歩き回っていないという事は無事だという証明だが。しかし、いまいち理由は飲み込めない。
意識がとぎれる前の記憶は、断片的な場面と遠い音だけとなっている。それらを総合しても、状況把握にはほど遠い状態だ。
まさか、自分だけがワイヤーの向こう側に転がされたのではない

か。そういう可能性に行き着いた瞬間、全身へと急速に意識が巡っていく。
頭の上から爪先まで、骨格の間接から筋繊維の反応などからダメージを確認する。浅く体を起こして脳機能と三半規管もチェックして、問題なくいけると判断した。
ベッドから起きあがり、辺りを見回して一人なことを認識する。背中に違和感のような痛みを感じるが、この程度なら動けるだろう。打ち身という自己判断のもと、感覚を遮断して意識から追い出す。
次に装備を確かめに自身へ目をやって、殆ど裸である事実に驚いた。
いや、そういう世界になったのだろう。助けるにしても、装備は取り上げて抵抗の余地を潰す。まるで捕虜のような気分である。
だが、それで無力化できるのは一般人までだ。
弓塚の家系なら、一本でも四肢が残っていれば十全。相手の殺し方を選ばなければ、喉笛を噛み切ってでも殺してみせよう。
小さく頷き、今の最大威力を計算しつつベッドを降りる。最低限のマナーとして、シーツをスカートのように腰へ巻き付け動き出す。
音はない。
滑らかすぎて気持ち悪い動きと、毛足の長いカーペットも手伝って気配すら消せそうな勢いだ。
いったん窓辺に近付いて、外の様子をうかがう。
そこから見えるのは、広い敷地とその空間を埋めるように建設されたテント群だった。無数にある内の殆どは、人が生活する用のピラミッド型だが。しかし、いくつかは大きな正面入り口をもったタープ型である。
これだけの多勢だ。おそらく、そこに物資関係を集中させているのだろう。もしかすると共同管理しているように見せることで、全体からの不平不満を減らす狙いがあるのかもしれない。
どちらにしろ、各タープ型テントの付近には見張りの人間がついている。とても一般人に見えない彼らが、実質の管理者ということ

だろう。
これらを人命救助というには、わずかな疑問が浮かぶ。
一瞬でここまでの体制を構築できる人物なら、それだけのために他人を集めて集団を作ることはないだろう。まずは自分の安全を確保し、それから親類縁者の保護を考える。そして、それ以上の危険は犯さずに今後の対応を模索していればいい。
だが、それを終えた上で打算的に人を集める理由ならいくらか思いつく。
自分がトップの新国家設立。純粋な物量としての戦力確保。気分。
浅く息を吐いて、窓から離れる。

「これを考えるのは、他の役目だな」

考えるのは颯斗の役目ではない。わからないことに首を捻るくらいなら、室内で使える物を探し出し、それで殺す方が有意義だ。カッターナイフかハサミの一つもないかと机を漁り、不意に鏡が視界に入り込んでくる。壁に吊してあるタイプの物だった。
それそのものが武器になるとは思えない。だが、中に写る自分に涙の跡があるのなら話は別である。
近付き、目元から頬の上側を通って後頭部へ行く線を指で撫でていく。
酷い顔だ。覚えていないが、何かの夢を見たのだろう。いや、涙が出るような夢など一つしか心当たりはないが。

「……」

名前を二つ、声は出さずに唇の動きだけで呼びかける。
返事はない。
当然の結果が胸を抉り、体を吐き気が襲う。吐き出される呼気が喉でつまり、吸い込む一方になりそうな肺を押さえ込んで床に手を

つく。
柔らかすぎる絨毯に手が沈み、長い毛足を握り込めば背中が脈打つように一つはねた。
か、と吐き出す音が聞こえる。
いっそ胃の中身を吐き出せれば楽なのかもしれないが、残念なことに出るのは苦悶の声とヘドロのような空気の固まりだけ。
慌てて呼吸を整え、思考を最適化するために機械の意志を起動していく。
あえて一度呼吸を止めて息を整えつつ、せり上がる嘔吐感も内蔵を移動させることで対応した。

「く、ぁ……」

浅く肩を上下させて、意識の均衡を確認する。
嫌になりそうだ。些細なトラウマですらこの体は反射的に対応してしまう。唯一残った最後の繋がりすら、克服するよりも先に無効化していく。

「た……くれ」

やはり、返事はない。しかし、嘔吐感もやってこない。
今、いつの間にか足を投げ出し、そして壁を背に座っている。
もしかすると、無様な姿を笑われるかもしれない。それでもいいから出てきて欲しいと視線を巡らせて、ありえないと自嘲の笑みが出る。
なにせ、彼女らを殺したのは颯斗だ。

‡

座り込んだままぼおっとしていたら、見たことのある人物が入ってきた。
ああ、そういうことかと安堵感を覚える相手である。この状況下と、今の居場所が一発で理解できる特典付きだ。
いっときは、この屋敷を完全攻略することも視野に入れていたが。どうやら、その必要もないらしい。
入ってきたのは、小室たちではない。厳つい顔立ちに軍服姿という、屈強そうな男である。

「久しぶりだな、颯斗君」
「ええ、本当に。確か、最後の依頼は四年前でしたか？　毎度、ご利用いただきありがとうございます」

差し出された服を素直に受け取り、適当に腕を通す。着替えは制服ではないが、まああれだけ無茶をしたのだ。服が無事だとは思っていない。
背中と袖、ついでに裾の脹ら脛あたりには穴が空いている自信もある。

「娘を守ってもらったようだ、感謝する。弓塚の御子息と行動をともに出来たのは、沙耶にとって幸運だった」
「ああ、やはり彼女は貴方の御息女でしたか。高城の姓でしたから、もしかしてとは思いましたが。まあ、基本的に守ったのは小室君や平野君ですよ。何より、ここが憂国一心会の根城だと知っていて連れてきたわけでもありませんし」

緩慢な動作で頭を通し、腰のシーツを外す。それを投げて一瞬のブラインドを作り、その間に下着とジーンズに足を通した。
白の布が床へ着地する頃には、すでに靴下を履いて客人用のスリ

ッパを部屋の端へ取りに歩いている。
うむ、と高城沙耶の父――高城壮一郎は頷きを持って動く。自身の横を通り過ぎる颯斗に対し、声によって言葉を継げる動きだ。
「他弓塚の人間は、連絡を絶っている。故に、目の前にいる弓塚の颯斗君へ頼みたい。私は、これから保護した人等へ生きる術を教えに行くのだが。それに協力してくれないだろうか」
「生きる術？　殺し方をレクチャーしろとでも言うのですか。残念ながら、弓塚の技術は訓練もしてない一般人に使える物ではありませんよ」
スリッパを履き、振り返る颯斗に壮一郎は首を振る。いや、という否定の言葉も続けて真っ直ぐに視線を合わせ。
「彼らの多くは、未だこの世界の根底が覆ったことを理解していない。殺人病や国軍を信じることで、待ちの姿勢に入りかけている。このままでは、誰一人として生き残れないだろう」
なるほどと納得しながら窓に近寄り、先ほど見た光景を再び観察する。
確かに、ここの雰囲気は緩んでいるのだろう。中庭にいる間は、とりあえずの安堵を約束されているのだから当然か。それが一時しのぎでしかないなどと、いったい誰が気付くのか。いや、例え気付いていたとしても、言い出せるものなどいない。
たぶん、きっと、おそらく。希望的観測だろうが、心のバランスをとるために必要なら、信じたくなるのは仕方のないことだ。
「貴方は、それで大丈夫だとは思っていないんですね」
「少なからず、ここに留まれば明日はないだろう」

生活に必要な物資。いつまで続くかもわからない電力とガス。他にも、考えるのが苦手な颯斗では思いつかないようなことを考慮した上での判断だ。
高城壮一郎という男が、そういう事を考えるのに長けた人物であるのは知っている。そして、それができるからこそ人が集うことも。
素質として、トップに立つ事を当然とする人種だ。颯斗とは生きる次元が違いすぎる。

「弓塚次期当主、弓塚颯斗。その要請を受諾します。報酬は物品で。何か一つ、音を発さない原始的な武器を要求します」
「了解した、すぐに用意させる。では、時間もないのでさっそく来てもらうか」

頷きだけで応えて、先に部屋を出る壮一郎のあとへ続く。
正常に作動している意識は、いまだに健在だ。考えることを止め、ただの機械に成り下がる心が言っている。
もう、何もかもが面倒だと。

‡

檻があった。内部を二部屋に仕切られた、二重構造の鉄格子だ。
中には一部屋につき一体の≪奴ら≫が捕らえられ、それぞれ低い唸りを絞り出して蠢いている。
檻の横。周囲よりも高い位置に、壮一郎が立っていた。声を張り上げ、広場に集まった人たちへ語るためだ。今の世界を、変わってしまったルールを説明して、解決方法まで示そうとしている。
一つ目の檻が開けられた。中から飛び出してきた≪奴ら≫は、誰かを助けるために行動した結果、噛まれてしまったらしい。

勇敢な行為だと思う。同時に、自分もそう出来るかと自問する。
答えはない。
視界の中では、壮一郎が刃を高く振り上げていた。元同志に引導を渡すべく、真っ直ぐに凶刃が振り下ろされていく。
噛まれた人間は助からない。それを知っているからこそ、楽にしてやるために彼は躊躇わなかった。
的確に首を切断した壮一郎は、高らかに語る。これが今なのだと。現実を直視しろと。出来ない者は死んでしまうだろうと。
たった一メートル向こうに、元人間だった物体の首が転げ落ちていた。そんな現実を突きつけられて、受け入れられる人間がいるのだろうか。
しかし、今はこんな荒療治が必要なときだ。確かに、受け入れられないなら死ぬしかないだろう。
ざわめく人々の声に、取り残されたもう一体の≪奴ら≫が反応している。何度も檻にぶつかり、押しながら前に進もうとしていた。
全ての音が、酷く遠い。誰かに行動の全てを決定してもらえるなら、それが一番楽な気さえしてくる。
目の前で、次の扉を開けるように壮一郎が言うよりも早く≪奴ら≫が外へ出た。金具の壊れる音と、鉄の軋む音が動きに続く。

「颯斗君！！」

声が来る。上から降る声が、背を押すような錯覚がくる。
聞いたことのある声だ。だが、どちらのだろう？
体が前に行く。距離は一メートル程度。ほぼ一瞬だ。
右足を地面に残したまま力を溜め、やや親指に重心を乗せる感覚。左の膝よりも先に、左の肩ごと半身を前へ投げ出す。そして、伸びきった左手を更に前へと突きだした。
行く。
二歩目で空気を掻くように右の腕を差しだし、肩が続いて膝も行

く。
この時点で届いた。右の手が優しく≪奴ら≫の額に触れるが、気付かずにそれは進もうとする。
視界の右側、そこに壮一郎は立っているはずだが。飛び出す直前に見た姿を思い出す限り、彼の体はこの事態に反応しきれていないだろう。
演説のために武器を下ろし、高らかに語っていた最中だ。それも仕方ない。
だが、とも思う。その鋭い目に、怯みや恐怖の色は欠片もなかった。
自分が危険なことは理解していたはずだが。それでも臆さない勇猛さと、取り乱すことで起こるだろう状況が見えているということか。
身を危険に晒しながら、それでも最前線へと進む。もはや――

「英雄のようだな」

跳ぶ。
着地した右足で踏み切り、側転するように空へ身を投げ出す。言葉にならぬ叫びを、届けと願う思いと共に発しながら。
英雄になりたかった。
あらゆる手段を使い。卑怯だと知って尚、影から殺す暗殺者ではなく。華々しく一騎打ちを申し出て、真っ正面から勝利する強さが欲しかった。
それさえあれば、あるいは『彼女ら』を切り捨てることもなかっただろうに。
だから思う。強く、強く思う。その思いを速度と高さに変え、必死になって手を伸ばす。

（届け！！）

飛び越え逆さになる風景の中で、左足の踵を≪奴ら≫の顎へ叩き込む。右手は額をホールドし、体を回す速度で強引に引きながら。
一瞬でもいいから、目指していた栄光に届けと身を捻った。
「おおおおおおおおおぉ！！」

落下する。
頂点まで行った速度と位置エネルギーを、全て一つの方向にまとめ上げながら落ちていく。
思わず出た砲こうに、手の中の≪奴ら≫は反応するが関係ない。どれだけバカ力が出ようと、弱点が頭だけだろうと、これの原型は人間だ。
構造が同じなら、プロレスラーだろうと幼稚園児だろうと関係ない。まったく同じ方法で、息の根を止められる。
落下していく。
既に、颯斗の頭は≪奴ら≫の肩より下まで来ていた。全体重を重りに、右手でホールドした頭を引っ張り寄せる。
そうして崩れていく重心を感じ、同時に背が地面へと触れた。肩から地面に行き、転がるようにして腰までを着地させ。
右手を全力で引いて、左踵を振り抜いた。
ぐちゃりと、濡れた音を響かせ≪奴ら≫の頭が踵と地面にサンドされる。頭の全てを砂利の底に埋め、遅れて付いてきた体は首から千切れて数メートルを転がっていく。
変に叫んだせいで、乱れる呼吸を整えながら思う。触れられる程度には、近付けたのだろうかと。
返事はないし、わからない。
壮一郎の立っていた、一段高い場所から地面までの距離を見て思う。無暗に派手なだけの技を使ってしまったと。
普段なら、こんな華美なだけの技を使うことはない。

だが英雄ならば、そうするのだろうかという疑問を思う。もしかしたら、近付けたのだろうかと。
落ちた胴体と、踵で潰された頭を見て人々は下がっている。つまり、それが答えということだった。結局は、どれだけ手を伸ばしても届かない。

「これが今、この瞬間に横たわる現実だ！　強制はしないし、あなた方が聞き入れてくれるとも思わないが！　それでも、ここにいる誰しもが選ぶことになる！！」

勢いで言葉を作っている自覚はある。暗殺者には、荷が重い舞台である事も承知の上だ。
この声を、聞き入れてくれる人はいないだろう。だがもし、ほんの少しでも聞いてくれる人がいるならと続ける。

「他人に頼りきり、主体に流されるのはいい。好きにしてくれ。そんなモラトリアムを、きっと味わっていられるのは一瞬だけだ」

なれなかった英雄の真似ごとに、虚しさすら覚えそうになりつつ。それでも口を動かし続ける。
首のなくなった≪奴ら≫を指示し、

「もし生きたいのなら、あなた方はそれを選ぶことになる。自分の意志で倒し、目の前を切り開くためには必要な方法だ」

逆にと言葉を作りながら、颯斗は後ろを振り返る。より正確には、二階のテラスからこちらを見下ろす少年たちへと視線を向けた。
手すりから乗り出すようにして、二人の少女が視線を向けてくる。冴子と妙子だ。
かつての彼女らを、あの二人に重ねて見ている失礼を心の中で詫

び。そうして視線を前に戻す。

「自分の命だろうが。財産だろうが。大切な人だろうが。守りたいなら、それを選ぶべきだ。そして、もしそれを選ばないのなら。勝手にやって、誰にも迷惑をかけないよう死んでくれ。生きることの拒否に、誰かの人生を巻き込むなんて莫迦をやるんじゃない」

気が付けば、ざわついていた人の波が静かに凪いでいる。この沈黙に、どういう意味があるのかはわからないが。願わくは、自分のような『どちらも選ばない結果』を出して欲しくはない。

ここまでの言葉が、誰に向けられたものなのか。心の中に自問して、答えは出さないまま口を噤んだ。

今はまだ、その答えを知りたくはない。自分にも、モラトリアムがあっていいはずだ。

‡

かなり無理やりだった気はする。だが、当初の依頼通りに≪奴ら≫を葬った。

できるだけ劇的で、人の心に刻み込まれるようなやり方がいい。そう言われたので、実践向きではない演舞用の技も使ってみた。

少し、余計なことを語りすぎた感はあるが。これくらいの失態は許容してほしい。どちらかと言えば、人々が決断を催促する形にはなっているはずなのだから。

当然、その判断が和平と決裂のどちらを向いているかなど知らないが。

むしろ、問題があるとすれば自分自身だ。

一体何を好き勝手に喋っているのだろう。意見の押し付けもいい

ところな暴走に、今さら羞恥心が顔を出しそうになる。

（これが噂の中二病か？）

いや、自分は高校生だから高二病なのかもしれない。

どちらにしろ、素敵な黒歴史を作ってしまったようで最悪だった。

ただでさえ、暗殺者の家系なんていうイロモノだというのに。キャラが濃くなりすぎて困る。

アッサシーン！　という呪文を唱えると消えられるらしいが。それにはまず、金ぴかのイロモノ英雄王が必要だ。

（イロモノばかりだと、生きづらいよなあ）

吐息して諦める。

流石に、上から串刺しは御免だ。そもそも、いくら弓塚でも分身の術なんて奇跡は取り扱っていない。

何となく小室たちと合流しづらいものを感じて、先に依頼報酬を受け取るべく壮一郎の部屋を目指す。

用意はできているから、いつでも来いとのことだった。ならば、可及的速やかに武具は確保しておきたい。

結局、折り畳み式弓は落下の衝撃でフレームが歪んでいた。連射ボウガンも、予備弾倉を回収する余裕がなくて破棄したと聞いている。極めつけに、折り畳み式斧は冴子の木刀と一緒に≪奴ら≫が持って行ってしまったとか。

実にたちが悪い。

戻ってきたのはナイフ二本だけ。一人なら余裕だが、複数名を護衛するのは厳しいだろう。ちょっと間をおいて冷静になってから、かつ万全の状態で合流する方がいいに決まっている。そうだそうだ、と心の中で誰にともなく言い訳をして進む。

今、足には靴を履いていない。ここは先ほどまでの、土足で歩き

回れる空間とは違う。板張りの細い廊下は、下足を要求する日本家屋のような作りになっている。実際、いくつかの見える部屋は全てに畳が敷き詰められていた。
洋館の中に、こんな空間を作る意味は分からないが。ぶっちゃけ金持ちの道楽だろう。和室の方が精神統一に適しているだとか、茶をたてるなら畳だろうとか。その手の無茶を通すのは、どんな言い訳をしたところで道楽だと颯斗は思っている。つまり、金とは偉大だなあということだ。

「弓塚颯斗です」
「うむ、入ってくれ」

襖の閉められた一室の前で正座し、中に向かって声をかける。入室の許可を出す声はややこもっているが、確かに壮一郎のものだ。威厳たっぷりな声に辟易しつつ戸を引いて中へ入り、座り直してから振り振り向き戸を閉めて頭を下ろす。
相手は金持ちだ。一応、この手のマナーは守っていこう。弓塚とは懇意だったらしいが、それは自分の親がという話しなだけだ。颯斗自身が壮一郎と会うのは、かなり久しぶりである。対応を間違えれば、彼は『弓塚の颯斗君は、殺し以外出来ない未熟者』という評価を下すだろう。
今の世界で、人のネットワークは物資と同じくらい重要だ。特に、巨大組織のトップともなれば何かと融通が利くこともある。下手に過小評価されて、いざというときに『頼られない』のは避けたい。
いろいろとチャンスを作るためにも、ここは我慢して得意ではない殺し以外に集中しよう。

「失礼いたします。依頼を完遂しましたので、その報酬をいただきに来たのですが……なぜ冴子が？」
「心配したというのに、ずいぶんな物言いだね」

歪みそうになる表情を固定して、なんとか耐える。今、一番会いたくない二人のうち一人が目の前いたのだ。むしろよく我慢したと誉めてほしい。
慣れた様子で着物を纏い、折り目正しく正座する冴子の姿は賞賛に値する美しさだが。いかんせん、今はタイミングが悪すぎる。賛美の言葉より先に、いろんな気まずさから頬がひきつりそうだ。

「私が呼んだのだ。そして、颯斗君にも聞こう。この刀をなんと見る」

この親父はわざとなのだろうか。いろいろと承知の上でやっているなら、たちが悪すぎて殴りたくなる。そもそも、骨董の鑑定をしに来たわけでもないのだが。
吐息と共に鞘から鋼の刃を抜き放ち、表面をじっくりと観察する。切っ先だけ両刃の作りをなんと言ったか、小さく首を傾げながら薄い波紋をなぞるように視線で追いかけた。
反りが浅いので、突き刺しても引き抜くのは容易だろう。そこを顧慮した上で、切っ先が両刃になっているはずだ。剣士が斬り合うためというより、戦場で使うための効率化が各所に見え隠れしている。

「なかなかの人切り包丁ですね。使う人間が使えば、かなりの戦力になりそうですが」
「なるほど。自分が使う、とは言わないのだな」

当たり前だ。これは剣士の使う武器であって、暗殺に向いた兵器というわけではない。使えないこともないが、この手の物を自在に操るには乗数による鍛錬が必要だ。颯斗が使えば、一五も斬った辺りで折れるか欠けるか曲がってしまう可能性がある。

せっかくの戦力だ。そんな事なら、冴子に渡して長く使えるようにしてもらうのが得策だろう。
刀を納め、隣に押し付けながら壮一郎を見据える。試すためにやったのだろうかとも思うが、崩れない表情からは意図が読めそうもない。

「それで？　報酬をいただけないなら、弓塚として相応の対応に出ますが。まさか、この日本刀を寄越すつもりではありませんよね？」
「もちろんだ。それは毒島家のご令嬢にと思った品だからな。君は剣士でもあるまいし、こちらの方が向いているだろう」

そう言って、壮一郎が出してきたのは銃だった。
いや、正確には違う。颯人はそれを手に取り、コッキングして残弾があることを確認しつつ眉根をひそめる。
それはガスガンだった。それも、颯斗が趣味で改造していた特製の品だ。直径六ミリの弾丸をプラスチックから鉛に代え、そして一発辺りのガス圧縮量を倍にしてある。音は最小限だが硝子程度なら貫通出来るし、人体が相手なら下手に貫通しないだけ死亡率を上げられるのである。
鉄ならいざ知らず、鉛は体内へ入れっぱなしにして大丈夫なものではない。
後日、実家が近くなれば取りに行こうと思っていた物の一つを手にしながら思う。これは、自分の部屋に置いていたはずだ。今の世界がこの状況なら、間違いなく敷地内のトラップが作動している。にもかかわらず、これを持ち出すことは可能だろうか。

「例え凄腕の軍人でも、フル装備で二分。むしろ弓塚ですら一五分で戦闘不能を謳う我が家のトラップは、一般人に荷が重いでしょうね。どうやって手に入れましたか？」
「ふはは、良い目だ。疑わずとも、それは預かっただけだ。不法侵

入はしていない」

壮一郎は、懐から紙片を取り出して差し出す。とても小さな紙切れだ。二つ折りになっているだけで、手のひらに収まってしまうほどのサイズしかない。

受け取り、中を開くのと同時に声は続ける。

「弓塚の人間は、連絡を絶った。そう初めに言ったのは覚えているな？」

紙片には、短い文で簡潔な事が書いてあった。文字の癖も、見覚えのあるものだ。

千鳥足のミミズが這い廻ろうとして失敗し、最終的にのたうち回ったようになっている暗号ともいう。

「なるほど。流石は歴代最高の慧眼を持つクソ親父殿。こちらの行動予測なんて朝飯前とは、先週の組み手でとどめを刺しておくべきでした」

「一応親だろうに」

呟くような冴子の言葉を黙殺し、颯斗は壮一郎を睨む。

彼は「連絡を絶っている」と言った。もちろん、その言葉に偽りはない。ただ単純に、意味を取り違えていただけである。

語感から意味合いを読み取れなかったお前が悪い、と言われればそこまでだが。どうせこの微妙な言い回しも、指示されていたのだろう。

紙にはこう書いてあった。

『お前まで、俺より早く死ぬなよ。バカ息子』

優しいんだか罵っているんだかよくわからない紙を握りつぶし、手の中の拳銃へと視線を落とす。
ごつごつとした形状が印象的な『グロック２６』を握りこめば、長年使い古した馴染みの感触を返してくる。隠し持つことがメインの、ブローバックガスハンドガンが傷だらけの表面を鈍く輝かせていた。
幻の匂いを吸いこんで、鉄錆に似た香りで眉根を歪める。
おそらく、わざとこれを預けただろう最低な父親を思い出し。むしろ、隠したはずの物をどうやって見付けたのか問い質したくなってきた。再会したときには、心からの礼を込めて頸動脈へ一太刀入れてやろうと心に誓った。

「報酬、確かに受け取りました。これにて、弓塚としての仕事を全うした事にいたします。戻るところもあるので、これにて失礼したいと思います」
「そうか。残念だが、それもまた決断だな。沙耶のことをよろしく頼む」

立ち上がる颯斗に視線も向けず、目を瞑って腕を組んだままの壮一郎が言う。おそらく最大級の懇願なのだろうが、見た目には威圧されているようにしか思えない。
軽く肩を竦め、冴子が立ち上がって続くのを視界の端に収めながら。

「その役目は、私の物ではありませんが。高城家の御当主様からの懇願なら、心に留めて置きましょう」
深々と頭を下げてから、来たときとは逆に雑な動きで襖を開けた。後から付いて来る冴子が、丁寧に戸を閉めたのを確認してから歩きだす。

行かなければならない。出来るだけ早く、装備を確保するために。
そして何より、夢を見てしまったのだから。
目的も、用事もできてしまった。ならば、やはり行かなければならない。
後悔がそこで待っているはずだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0263x/

Dead of the world

2011年12月29日06時47分発行